

## 第五編 流通總論

(以下續經濟學講義を収録す)

### 第一章 緒論

本編以下は其全部を擧げて流通の理論の説明に充てんとするものにして經濟學の理論を二分したる其後半に當るものとす。今日の經濟生活を觀察するには、一は之を其基礎條件と構造に就てし、一は其活動の狀態に就てす可きことは、凡そ學者の見解一致する所にして、第一編至第四編は即ち其前半に就て粗ぼ説明を盡したり。但し右第四編に於ては普通前者に屬すと認めらるゝ企業理論は、單に生産働因論中に於ける其地位を示すに止めたり。是れ熟考の結果に出づるものにして、企業の理論は經濟生活活動の研究の劈頭に來る可きものにして、生産論の終末に置く可きものにあらずと信ずるに因れり。

其理由は兩項に分けて之を擧ぐることを得。即ち

一 企業は土地資本勞働と同一の觀察を下して之を一生産働因と見る可からず彼の三者は今日の經濟生活の基礎的要件として殆んど一定不易の性質を有するも企業は其形態に於ても其運用に於ても著しく變遷しつゝあるものなり。

二 而して今日現在の經濟生活活動の『アルファ』にして『オメガ』たるものは獨り企業なり。土地資本勞働は企業の手に於て結び付けらるゝによりて始めて其意義を有し、企業の爲めに運用せらるゝによりて始めて經濟生活に用を爲す。故に經濟生活活動の解剖は、先づ企業の理論を正しく理解することより始めざる可からず。之と共に現時經濟生活に對し批評を試み其改造を案するものは流派の何たるに關せず必ず先づ企業の批評又は非難を以て論を起すの實あり。

然るに從來の經濟學にありては、『如何に國富を充實す可き』を以て研究の出立點とする往時の思想の影嚮を脱するを得ざりしが故に限ある土地に勞働を加へて人間欲望の充足を得るに方り先づ資本起りて其調和を圖り勞働力の増進に著しく寄與するもの

なりとの點を主として研究し續いて其資本の運用は企業てふ組織を産み出すによりて更に其効果を増大するものなりとの見解を立つるに至れり。マーシャルも幾多の點に於て新らしき試を爲したるに拘らず企業理論の取扱に付ては未だ從來の舊套を捨つる能はざりし爲め稍々不調和なる配置を爲すことを免れざりしは前編の終章に於て指摘し置きたる所なり。予は先づ此根本の問題に就て十分の考慮を重ねたる結果今や斷然心を決して從來の結構を改むるの可なるを悟れり。乃ち本編に於ては先づ企業の理論を劈頭に置き以下の説明は悉く此根本的立場よりして之を下さんと欲す。經濟原論教科書に於ては舊來の立場を其儘に繼承し置けり。

さて以下を一括して之を流通の理論と名くるに付ては予は幾度か躊躇せざるを得ざりき。近來社會學の研究盛となり經濟學も亦た其影響を受けてシユモラーの如き新案を産み出し延いて經濟學理論を靜學と動學とに二分せんとする傾向著しく近くはオツペンハイマーの如く『純正經濟學』と『政治經濟學』との別を立て、前者を以て粗俗所謂基礎理論の研究に充て後者は現實の政治組織社會制度の範圍内に限り適用せらる

可き動態の理論に充つるあり、又たシユムペーターの如く『經濟發展の理論』を特に設けんとするものあり。ブレンタノ師亦其の講義を二分し前篇を『經濟生活の基礎條件論』とし後篇を『今日の經濟組織論』とせり。思ふに此くの如きは最も能く經濟理論の性質に合ふ區分なる可し。さてマーシアルの區分は一見する所大に之と異なるもの、如くなりと雖も心を潜めて熟考玩味するときは、氏が見る所も亦大體に於て此傾向の外に出てざるものと斷言して大過なし。即ち氏の第五編『需要供給價値の一般關係』と第六編『國民所得の分配』とは、從來の經濟學四分法に於て『交換論』と稱するものと『分配論』と稱するものとに該當するものたるや勿論なれども、既に前編詳述したる如く氏は

需要論(第三編)  
供給論(第四編)

需要供給調和論  
第五編  
第六編

(前段四二一頁を見よ)

とする第一版に於ける結構を大體に於て一貫しつゝあるものにして而して氏自ら其書の主要部分が需要供給調和の状態に關する研究に存するを公言するに徴して其眞意推

知す可し。曰く

But in fact it is concerned throughout with the forces that cause movement: and its key-note is that of dynamics, rather than statics.

然れども實際は此書を終始一貫して研究の主題とする處は運動を惹き起す力にあり、而して中心の考へは動態の側にありて靜學に存せず

(第六版一九一〇年刊行の序文第八頁)

又た曰く

The main concern of economics is thus with human beings who are impelled, for good and evil, to change and progress. Fragmentary statical hypotheses are used as temporary auxiliaries to dynamical—or rather biological—conceptions: but the central idea of economics, even when its Foundations alone are under discussion, must be that of living force and movement.

經濟學の主題は善かれ悪かれ變化と進化とに促がし推さるゝ人間是なり。斷片的なる靜學的假定を用ゐざるにあらざるも、畢竟動態的—又は寧ろ生物學的—概念を一時的に援助するの具たるに過ぎず、經濟學の中心觀念は—基礎論の考究に於ても—必ず活きた

る力と運動の觀念ならざる可からず

(以上第九頁)

されば此の活力と運動との研究に集中する氏の第五第六兩編が氏の研究中の白眉にして其精力を傾注して之を完成するに勉めたる次第なれ。

然れども予は此編以下に題するに動態の名を以てするを欲せず其故は簡單なり。經濟學全部動態の研究たる可きは前諸編を讀みたる人の知る所なる可く殊に需要供給の本質は運動の力として之を見るにあらざれば其真相を捉ふると能はず(生産が活動なることは言ふ迄もなければ)經濟學の生産論は生産其物を論ぜず専ら生産の働因條件を研究するものなれば此等は假りに靜態と假定して論を立つるものなりとも云ひ得べし。此點能く辨別するを要す。唯だ前編は研究并に論述の態度に於て主として記述的平置的なるを常とするに後者即ち今本編以下に於て取扱はんとする部分は其題目も活動其ものなれば研究の態度も亦活動の經過に對するものならざる可からず。故に予は熟考の結果特に動靜の區別にのみ重きを置かず主として本編以下の題目とする所の統

一的表徴を求めて其の流通の一事にあることを認め此を以て其の問題を言表はし置かんと欲するものなり。而して流通は從來の經濟學に於ける交換と分配との二者を總括するに方ること猶マ氏の第五第六兩編に於けるに同じくブ師が『今日の經濟組織』と云ひシュモラーが『財の流通及所得分配の社會的行程』と云ふもの亦た粗ぼ之に當れり。唯だシユ氏は企業論を其原論の第二編『國民經濟の社會的組立其の發生其器官其の現状』の末部に置くことマ氏と全く同様にして専ら企業の形態の説明に力を用ゐたるは予が今執る所の見解とは全く異れり。之に反しブ師は其講義に於て企業の説明を第二編の初めに置き『誰が生産者なりや』の一項に於て今日の經濟活動の源は企業にのみある所以を説きたり。師の小著『企業者論』の趣意亦全く之に同じ。予が多年思考の結果幾度か彷徨して終に再び師説に歸着したるは抑も其故なしとせず。是れ聽て予が流通理論なる統一的名稱の下に交換分配によりて活動する經濟生活の一切を一貫して論述すること最も當を得たりと爲す理由にして鬚きに粗ぼ確定の見解を得たるものとして小著經濟學教科書今經濟原論教科書と改題すに於て梗概を叙述し置きたる所なり。故に本

書の讀者にして豫め卓見の概要を知り置かれたき人は彼の小冊を一覽せられれば便利なる可し。本集後段一二五三頁以下に收む。然れども彼書は單に筋道を示すに止めて其理由に就ては言及する所なければ予が新たに得たる立場に就て多少の疑あるを免れざる可し。故に今此一章に於て稍々詳しく之を述ぶるの要ありと信ず。

經濟學に科學的研究法を定め、又た其の體系を立つるに就てはアダムスミスに次ではリカルド預て最も力ありて、今日行はるゝ經濟學の成立と其研究の狀態とに關係ある點より云へば、後者は遙かに前者を凌ぐものなることは學者の一般に認むる所なり。さてリカルドが其原論に於て中心の問題としたるものは分配の問題にして、彼は之を彼が主張する價値の根本原則の適用として考究したり。彼の學說中最も多く後世に影響を與へたるものは實に此分配の行程に於ける價値の運用論即ちマ氏が其舊版に於て『所得の分配者としての價値』と名けたるもの是なり。リカルドの經濟理論は其原論の初六章に於て粗ぼ盡したるものにして、以下の諸章は斷片的に各種の問題に涉りて布演論及したるに過ぎず。其六章に於て彼が説く所を見るに、先づ初めに價値の本質を定めて

The value of a commodity, or the quantity of any other commodity for which it will exchange, depends on the relative quantity of labour which is necessary for its production, and not on the greater or less compensation which is paid for that labour. (原論第三版第一頁)

一財の價値即ち一財に換へて得らる可き他の財の分量は、其の財の生産に必要な勞働の相對量によるものにして、其勞働に對して支拂はるゝ報償の多少によるものにあらずとせり。即ち後世の所謂勞働即價値説にして、勞働を要すること多きもの價値多く、其少きもの價値少しとの根本義を立てたるものなり。但し普通經濟學の書にリ氏の説を論ずるものは唯だ此一點のみを捉ふるに急にして、右の定理中に更らに第二の重要な主張を含むものなることを忘るゝもの多し。リ氏は『價値は財の生産に必要な勞働の相對量による』と主張すると同時に、『其勞働に對して支拂はるゝ報償の多少によるものにあらず』と特言したるものにして、氏が理論の全體より見れば、此の否定的主張こそ却て遙かに重要なり。リ氏の真意は單純に價値の定義を下して、勞働の分量によりて定まると爲すにあらず、價値の定まるは勞銀の多少に拘るにあらず、現に費さるゝ勞働の分

量の多少によると云ふにあり。換言すれば、價値の定まるは分配の行程に關係なく獨り生産の行程に於てすとするなり。故に氏の意現に生産に施さるゝ労働の分量と其労働に對して支拂はるゝ労働の額とは必ずしも相伴ふものにあらず、兩者の關係は區々にして多き労働の分量に對して少き労働の支拂はるゝことあり、少き労働の分量に對して多き労働の支拂はるゝことあるを認む可しとするものなり。従つて所謂 *Verteilende Gerechtigkeit* 『分配の正義』の存在は氏の認めざる所たると共に、價値の定まる所以は毫も此に關係なきを明瞭に主張するものなり。氏に取りては價値の定まるは分配の行程と毫も關連することなく、唯だ生産の行程とのみ關連す。是れ氏の學說の眞意を解するに肝要不可缺點なり。然るに後世の學者唯だ労働を以て價値の決定原因とするの可否のみに就て論究し、這箇重大なる問題の別に存するを忘れたるは遺憾此上なきことと云はざるを得ず。此の重大なる缺陷あるが爲め、氏の説の爾餘の部分は甚しく誤解せられ、又た曲用せらるゝに至り、殊に其の地代論の眞意は全く諒解せられざりしやの觀あるに至れり。リ氏は右の根本主張を樹てたる後、更らに其否定的主張を革固にせんが爲め

*Labour of different qualities differently rewarded. This no cause of variation in the relative value of commodities.* (以上十五頁)

種類を異にする労働は其受くる所の報償も異なる、然れども此は決して財の相對價値の差異の原因ならず

の一節を設けて反覆説明する所あり。而して曰く

*As the inquiry to which I wish to draw the reader's attention, relates to the effect of the variations in the relative value of commodities, and not in their absolute value, it will be of little importance to examine into the comparative degree of estimation in which the different kinds of human labour are held. We may fairly conclude, that whatever inequality there might originally have been in them, whatever the ingenuity, skill, or time necessary for the acquirement of one species of manual dexterity more than another, it continues nearly the same from one generation to another; or at least, that the variation is very inconsiderable from year to year, and therefore, can have little effect, for short periods, on the relative value of commodities.* (同上十五頁)

予が讀者の注意を惹かんと欲する研究は財の相對價値に於ける變動の結果に關するものにして、其の絕對價値の變動に關するものにあらずれば、人間労働の異なる種類に對す

る評價の比較的度合のこゝを論ずる必要なし。吾人は次の如く結論して差支なかる可し、財其ものに如何なる不平等固着せりとも、一の労働堪能を習得するに要する才能熟練又は時間が如何に他のものと異なるとも、其差違は一代より次代に傳へらるゝに方り殆んど同一の割合を保つ可く少くとも、一年と次年との間の差は甚だ微少なる可く、從て短き時期に就て見れば、財の相對價值に及ぼす其影響は殆んど皆無なる可し。

斯く、リカルドは價值の本質を分配の行程に關係なく生産の行程の上のみに就て考究し、生産に要したる労働の分量が其の財の價值を左右すとの根本原則を立て從つてマルサスが『支配せらるゝ労働』云々を主張するに極力反對したり。蓋しマルサスは價值を以て生産の行程に於て定めらるゝものと認めず、主として交換の行程に於て定めらるるものとし、一財の價值は其の財を交換場裡に提出し他物と換ゆるとき換へて得來る他の労働の分量によりて定めらるゝものなりと主張したり。故に兩者の見解は全然相容るゝ能はず。然るにリカルドの説獨り行はれ、マルサスの説は殆ど其姿を失ひたる經濟學に於て、價值論が主として交換の問題としてのみ考究せられたることは一見甚しき矛盾なるが如し。然れども右根本原則を立てたる後のリカルドの論述を一瞥するときは其れは決して怪しむに足らざるものなるを容易に發見し得べし。リカルドに取りては生産の問題は極めて簡單にして、殆んど經濟理論を構成せず、價值は生産に於て費されたる労働の分量によりて定まるとの根本義の説明を爲す以上、何等の用なきものなり。其の根本原則たる極めて簡單明瞭なるものなれば、其意義を明かにする外、生産論として他に問題存することなし。經濟理論の出立點は此根本義其のものよりも、寧ろ其が實際の運用如何にあり、即ち經濟生活に於て此根本義が原則通りに行はれずして種々の變態を呼び起すこと、是れ經濟理論の研究の對象たる可きものなれば、根本義其ものに就ては、冗言を弄するの餘地なし、況してや此根本義と並行する他の生産問題の如きは元より之あるを認めず。是れリ氏が財の相對價值に於ける變動のみが問題にして、其絕對價值は問題とならずと極力主張する所以なり。換言すれば、經濟學研究の手を著く可きは價值の實質論にあらず、價值の運用論なりとの意なり。さればリ氏は右の如く種類の異なる労働は其受くる所の報償も亦異なるは勿論なれども、其は財の相對價值變動の原因ならずと斷言

其受くる所の報償も亦異なるは勿論なれども、其は財の相對價值變動の原因ならずと斷言

し、さて以下其費されたる労働とは、直接其財の生産其ものに現に要するものゝみを言ふに非ず其労働を補助する器具機械の生産に費さるゝ労働をも含むものなりとし、茲に其研究の本體を提出したり。蓋し生産に費されたる労働の分量が價值を定むとの原則が實際の生活に於て種々の變態を喚び起す其根本の原因は其労働なるものが現に其財に直接に施さるゝ労働のみならず、過去に於て費されたる労働をも含むことに存すればなり。即ち生産に費さるゝものに、現在の労働の外に、過去労働の蓄積たる資本あり、是れよりして經濟學に其研究を要す可き問題が與へらるゝとなす。故にリ氏は其第一章第四節に命題して曰く

*The principle that the quantity of labour bestowed on the production of commodities regulates their relative value considerably modified by the employment of machinery and other fixed and durable capital. (同上二十五頁)*

財の生産に費さるゝ労働の分量が其相對價值を定むこの原則は、機械其他の固定及永續資本の使用によりて著しく變更せらるゝ。

と。蓋しアダム・スミスも價值を定むる原因を労働にありとなせども、此に重大なる條件を附して、*In that early and rude state of society, which precedes both the accumulation of stock and the appropriation of land* 『資本の蓄積并に土地の私有が未だ起らざる以前の原始草昧の社會』に限れりとし、今日の如く資本の蓄積あり土地の私有ある社會には其原則は行はれずと説きたるに對し、リカルドは此兩者の存する社會、即ち資本の利潤と土地の地代とが支拂はるゝ、今日に於ても、猶此原則は行はると主張し、唯之が爲に影響せらるゝ程度に於て差違あるものなれば之を研究することが即ち經濟學の主題なりとしたり。従つてリ氏の經濟理論は以下資本の二種、即ち固定流通兩資本の割合の差違より來る右原則適用の差違貨幣價值の變動より來る差違を第一章に於いて研究し、續いて地代論（第二章）礦山地代論（第三章）自然價格市場價格論（第四章）勞銀論（第五章）、利潤論（第六章）の五章に於て、右原則の差違を論じて經濟理論の本體をなせり。換言すれば、リ氏に取りての經濟學とは、價值の根本原則の分配（并に交換）行程上に於ける運用の研究の謂に外ならず、故に氏は其の序文の劈頭に於て實に左の如く云ひ居るなり。



The produce of the earth—all that is derived from its surface by the united application of labour, machinery, and capital, is divided among three classes of the community, namely, the proprietor of the land, the owner of the stock or capital necessary for its cultivation, and the labourers by whose industry it is cultivated.

But in different stages of society, the proportions of the whole produce of the earth which will be allotted to each of these classes, under the names of rent, profit, and wages, will be essentially different; depending mainly on the actual fertility of the soil, on the accumulation of capital and population, and on the skill, ingenuity, and instruments employed in agriculture.

To determine the laws which regulate this distribution, is the principal problem in Political Economy: much as the science has been improved by the writings of Turgot, Shart, Smith, Say, Sismondi, and others, they afford very little satisfactory information respecting the natural course of rent, profit, and wages. (同上序文一乃至二頁)

地球の所産、即ち労働・機械及資本の共同作用によりて、其表面より獲得せらるゝものは社會の三階級の間に分配さる。即ち土地の所有者、其耕作に必要な蓄財、即ち資本の所有

者并に耕作の業を營む労働者は是れなり。

然るに社會發達の程度異なるに從ひ此等三階級間に地代・利潤・勞銀の名の下に分布せらるゝ地球の全産物の割合は著しく差違あり。其原因は主として土地の實際豊度の如何、資本及人口蓄積の度如何、及び農業に使用せらるゝ熟練・才能・器具の如何にあり。

此の分配を支配する法則を決定すること、是れ經濟學の主たる問題なり。然るにチュルゴ、シチュアット、スミス、セイ、シスモンヤ其他の學者の著作により、經濟學は大に進歩したるに拘らず、地代・利潤及勞銀の自然行程に關する研究は未だ満足を與ふるもの甚だ尠し。

之を要するに、リ氏は現在の經濟生活に於て各種階級間に所得の分配せらるゝ其法則が生産に關與したる割合を必ずしも並行せず、各階級の受くる所の價值は、生産物全體の價值と相副はざる所以を究むることを以て、經濟學研究の主題と認めたるものと斷言するを得可し。之れ實にマルサスを彼が根本見地の異る所にして、リ氏が『費されたる勞働』を主張して、マ氏の『支配せらるゝ勞働』云々の主張に對抗したる所以なり。

予は今茲にリカルドの批評を試みんとして以上の引照を爲したるにあらず。唯だリカルドによりて定められたる經濟理論の本體如何を明かにせんを欲するのみ。是れ總て予が本編以下の主題を流通てふ一語の下に總括する理由を語るものなればなり。經濟學に三分法あり四分法あることは前編に於て既に説明したる所なるが三分法の普及に預りて最も有力なるセーあるにも拘らずリカルドが此く分配のみを主題としたること而して名目の上に於ては三分法又四分法一般に行はるゝに拘らず實質の上に於ては依然としてリカルドが一度定めたるもの最も強く經濟理論を左右しつゝある一事は決して單に後代學者に獨創の見識なく附和雷同を是れ事としたるが爲めにあらず。經濟學の本質は誠に克くりカルドによりて看破せられ後の精密なる研究を以てしても多く之れを變更することを得ざるが爲なり。リカルドの語を以て云へば經濟理論の主題は相對價值にして絶對價值にあらず。元よりリカルドが先づ始めに勞働即價值てふ大原則を置き以下凡て之より演繹して分配行程を論究す可しと爲したる論理法は今日の學者の一樣に非難する所にして予も亦之を執らず。然れども後の學者が附加したる生産

論は生産要素論否生産要素増加論の水平以上に昇らず其最も廣汎なる法則として認む可き收殺遞減の法則は元來經濟學特有の問題にあらず(人口論も亦然り)而して資本に關する理論多くは常識談の範圍を出でざることには前編詳かに之を論じたる所の如し。即ち經濟學が經濟學として正當に自己の領域を爲し得るものはリカルドが其原論の初めの六章に於て論じたる所のもの以外に出でず。

さて此の經濟學固有の領域はリカルドは分配なりとせり。而も彼は其第四章に於て自然價格及市場價格を論じ今日多く交換論と認めらるゝものをも含めり。元と交換論たる一項目を設くることはジェームスミルに始まると既に説きたる如くなるが是も亦生産論と同じく所詮は名目を備ふるに過ぎずして内容は具備せず。交換と云ひ分配と稱して分割す可きものは實際には存せず交換することには即ち分配することにして分配は亦た必ず交換の行程によりて行はるゝの外なし。故に予はリカルドの分配と稱せし意を擴張して所謂交換をも包含す可き稱呼を求め之を流通と稱す。即ち與へられたる社會組織の下にありて相對價值の各經濟行為を經濟財に歸依する行程の全部を一

括するものにして其中心の問題は實に價格にあり。マ氏の所謂需要供給の調和點即ち價格なり。需要供給の兩者相交渉して茲に價格定り、價格定りて茲に各人の分配分即ち所得定まる、故に價格はマ氏の云へる意にての國民所得の分配を決定する主宰者なり。如何にして價格が定まるや、如何にして價格は分配を定むるや、是れ流通論の中心問題にして、又た經濟學研究の一切が到達す可き最後の問題なり。他の凡ての研究は畢竟豫備的研究の性質を有するに過ぎず、多くは他の科學研究の結果を藉り來りて始めて着手するものなり。獨り茲に云ふ流通の問題即ち經濟的社會に於ける人類行爲其對象に就ての問題のみ、他の何學も容喙するを許さざる經濟學獨得の論題なり。他の語を以て云へば、自然現象としての研究にあらざり、現に具體的に與へられたる社會關係に於て、各人各財が受くる所の價值是れ經濟學特有の問題たり。されば其研究は常に與へられたる社會關係（之を經濟學教科書に於ては實力ミ名け置けり）に就て試むるの外なく、之を度外に置きたるものは、少くも今日の意味に於ける經濟學の研究ミならず。此社會關係の一切の中樞を握るものは今日現在に於ては企業なり。故に流通の理論は、先づ此企業理論を以て問題せざる可からず。以下章を重ぬるに従ひ此意味明瞭なる可し、茲には唯だ讀者が本論結構の大體を知り置かんことを望むのみ。

## 第一章 補論

シュムプター及オツンハイマー兩氏の書は近來經濟學の研究に一新方面を開きたるものにして甚だ注意に價す。シュム氏には左の二書あり。

Joseph Schumpeter,

(1) Das Wesen und der Haupinhalt der theoretischen Nationalökonomie. Leipzig 1908.

(2) Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. Leipzig 1912.

前者に於て氏は曰く

Wollen wir aber diese Probleme wirklich in Angriff nehmen, so müssen wir zugeben, dass es bedenklich um unsere Wissenschaft steht. Wir sind verurteilt, alle diese Dinge in dieselbe aufzunehmen

und haben ein für allemal auf Klarheit und Selbständigkeit unserer Ausführungen zu verzichten. Auf Klarheit: Denn man sieht, dass die angedeuteten Probleme einen Charakter tragen, welcher klare und präzise Lösungen ausschliesst. Zum Teile gehören sie ja in das Gebiet der Metaphysik und dieser Umstand allein macht wahre Exaktheit unmöglich. Wie dicke Nebel lagern dann die Unklarheiten der Metaphysik auf unserem Wege und behindern den freien Ausblick. Auf Selbständigkeit: Denn manche jener Probleme gehören anderen Wissenszweigen an, der Psychologie, Physiologie, Biologie. Auf diese Disziplinen, in denen wir stets nur Diätanten sein können, bleiben wir angewiesen, und von wirklicher Autonomie unseres Gebietes kann keine Rede sein. S. 23-24

吾人にして此等の問題を眞に捉へんと欲するときは我經濟學は危殆に瀕することを否む可からず。吾人は此等の各般の事物を我學に收容するときは吾人の研究は明瞭と獨立とを捨つるものなるを覺悟せざる可からず。明瞭を捨つ—何きなれば此等の問題たる明瞭にして精密なる解決を許さざる性質を帶ぶるものなればなり。此等は一部は形而上學に屬す此事情丈けにても眞正なる精密を不可能ならしむ。形而上學の不明瞭が如何に濃厚なる霧を我が途上に横へ自由展望を妨ぐるかは多言を要せじ。獨立を捨つ

—何きなれば此等問題の多數は心理學生理學生物學等他の學科に屬す吾人は此等諸學に就ては到底下手の横好たるを免れず從て吾人は獨立自守の研究者たる能はざるなり。(二十三—二十四頁)

かくて氏は經濟學を以て『欲望充足を研究する學』『經濟行爲を研究する學』『經濟の本則の發動を研究する學』なりとする通説は皆根本に於て此嫌あるを免れざるを論じ、是等の見解は畢竟不可能事を標榜するものにして終に經濟學の獨立存在を否定するの結果に陥る可きものなるを主張し最後に『財の生産分配消費を研究する學』なりとする三分法説を評して左の如く云へり。

Oft nennt man die ökonomie die Lehre von der Produktion, Verteilung und Konsumtion der Güter. Allein wir behandeln in der Theorie nicht alles, was zur "Produktion" gehört. Nicht z. B. die Technik der Produktion. Von der Konsumtion behandeln wir nur wenige Fälle, z. B. den Konsumtionsaustausch, der im Sparen liegt; im allgemeinen aber steht dieselbe sozusagen hinter den Vorgängen, die uns interessieren. Und auch das Verteilungsproblem behandeln wir nicht erschöpfend, sondern nur eine Seite

dessellen. Welche Teile von diesen drei Phänomenen Gegenstand unserer Erörterungen sind, wird nicht gesagt — das charakteristische Moment fehlt. S. 31.

學者また往々にして經濟學を以て財の生産分配消費を論ずる學なりとするものあり。然れども其所謂生産論に於て説く所を見れば、生産に屬する一切の事項を研究するにあらず例へば生産の技術の如きは元より之を論ぜず。消費論に於ても單に若干の場合例へば消費の延期より來る貯蓄の如きものを論ずるのみ。此等の事たる所詮吾人が研究せんとする經過の後面に存するものたるに過ぎず。分配論に於ても分配の一切の方面を研究せずして唯一方面のみを問題とす。即ち此等生産消費分配三現象の何れの部分が吾人研究の題目たる可きや其特色の點は何なりやに至ては終に一言之に及ぶことなし。(同上三十一頁)

而して氏は此の經濟學の主題を認むるものに就て左の如く云へり。

Überblicken wir irgendeine Volkswirtschaft, so finden wir jedes Wirtschaftsobjekt im Besitze bestimmter Quantitäten bestimmter Güter. Am Boden unserer Disziplin liegt nun die Erkenntnis, dass alle diese Quantitäten, welche wir kurz "ökonomische Quantitäten" nennen wollen, in gegenseitiger Ab-

hängigkeit von einander stehen, in der Weise, dass die Veränderung einer derselben, eine solche alter nach sich zieht. Das ist eine einfache Erfahrungstatsache, die so sehr auf der Hand liegt, dass sie kaum einer Erörterung bedarf. Wir wollen sie ausdrücken, indem wir sagen, dass jene Quantitäten die Elemente eines Systemes bilden. ... ..

Finden wir nun, dass sie in einer solchen Verbindung stehen, dass zu einer gegebenen Grösse einer oder einiger derselben eine gegebene Grösse der anderen und nur Eine gehört, so nennen wir das System eindeutig bestimmt. ... ..

Wir nennen diesen Zustand den Gleichgewichtszustand. S. 28

何れなりとも國民經濟のある處には各經濟主體は一定の財の一定の分量を所有し居らざるはなし。さて我經濟學の領分は此等一切の分量—之を經濟上の分量と略稱す—が相互に依頼關係に在りて一量の変動は必ず他の凡ての分量の變動を惹起する所以を研究するにあり。此は誠に簡單なる經驗上の一事實にして別に證明を俟たず。故に吾人は此等分量は一の體系を作る要素なりと云ふを以て足れりせせん。……さて此等の結合たる其中の一又は若干の一定の大きさには他のものと一定の大きさ—其は唯一の大きさを

して一が屬するものなるを知らざる時は、此體系を以て一義的に定められたるものなりと断じ得可し……此の狀態を名けて均衡の狀態を云ふ（同上二十八頁）

右は用語は異れども其趣意に至りては予が後段説く所の循環の生活の特色を道破したるものなり（但し分量に重きを置くことは妥當ならず）。讀者彼此對校して之を辨ぜよ。第二著『經濟發展の理論』に付ては後に述べ可し。

オッペンハイマーの著は原名左の如し。

Franz Oppenheimer,

Theorie der reinen und politischen Oekonomie. Ein Lehr- und Lesebuch für Studierende und Gebildete. Berlin 1910.

此書近來に至り、同氏著『社會學體系』の第三卷に編入せられ浩瀚なる二冊に分つて第五版を刊行せり。著題左の如し。

Franz Oppenheimer, System der Soziologie. Dritter Band. Theorie der reinen und politischen Oekonomie. Erster Halbband: Grundlegung. 5. Aufl. 1928. Zweiter Halbband: Die Gesellschaftswirt-

schaft. 5. A. 1924.

此書には非難す可き議論も尠からざれども取る可き所も亦多し。以下本書の論述の進むに従ひ間々論評を加ふるこゝある可きなり。此他にアモンの新著

Alfred Amro

Objekt und Grundbegriffe der theoretischen Nationalökonomie. Wien und Leipzig 1911.

あり、論旨はオッペンハイマーに大に異れども經濟學の純理的研究を振興せしめんとする目的に於ては彼此異なる所なく、亦有用の作を云はざる可からず、其他レキシスの原論、フヘツシアアの原論、タウシツグの原論、チアツプマンの原論等本書の前編たる經濟學講義執筆時以後に顯はれたるものに有益のもの尠からず。

さて本文引照する所リカルドの原論には三版あり、第一版は千八百十七年、第二版は同十九年、第三版は同二十一年の刊行にかゝる。普通に行る、マカロツク版は第三版の重刷なり。予は以上三版を比較して予が考を立てたり。引用の頁数は第三版のを取り。

予師の『企業者論』の原名は

Lajo Brentano,  
Der Unternehmer. (Volkswirtschaftliche Zeitfragen. Heft 225), Berlin 1907.  
なり。

## 第二章 流通生活の意義

企業を中心とする流通生活の意義は一言に之を約するを得可し。曰く価値の發展是なり。發展を喚起す可き價值移轉の行程の一切は、即ち吾人が茲に流通生活と稱ふ所のものなり。從來の所謂交換論も分配論も先づ一定の價值總量を與へられたるもの前に提し置き、さて此一定總量が如何に交換せられ如何に生産關與者の各階級間に分配せらるゝやを研究せんとするものにして、リカルドは即ち此が定型を指示したるものとす。生産せられつゝ交換せられ又た分配せられ分配せられ交換せられつゝ生産せらるゝ流通生活の實際狀態其のものを直ちに主題とするものにあらず。而してリカルドの祖述

者は其根本の立場を精査することなく唯だ屋上更らに屋を架し、セーが唱道したる欲望一行爲―充足てふ定式をも其儘襲踏し、一切の交換分配の行程を擧げて此の循環定式の下に置き、而して曰く、經濟生活とは畢竟欲望の充足の行程の謂なり此行程の中與へられたる生産要素に變化増減起るべきは此行程亦變化せざる能はず、富の増殖減少は即ち之より起る也。生産要素の中土地は分量に於て増減すること殆んば期す可からず、唯其豊度に増減ありて生産上に影響を及ぼすに過ぎず、人口の増減は主として土地收穫の増減によりて左右せらるゝ、二者共に或度以上に及べば、人力を超越する天然の作用に是れ困る。獨り資本のみは人間の意志と働きとにより著しく之を増減し得可し、從て經濟發展の主動力は先づ資本増減の作用に之を求む可く、資本増加の第一の方法は貯蓄にあり、而して企業は斯く貯蓄によりて創造せられたる資本あるによりて始めて其活動を開始するを得るものなり也。今予が茲に試みんと欲する所は、此の通説を根柢より打破せんこと是なり。換言すれば、流通生活の意義は欲望―行爲―充足てふ定式を超越するによりてのみ之を究明し得るの理を明かにせんこととす。是なり。

予の知る限りに於て這箇の定式を打破して別に經濟發展の眞意を捕捉せんとしたるもの前記ミョンベールあり後にカールマルクスあり。レーは千八百三十四年に著したる其『經濟新論』に於て言つ曰く

It thus appears, that it is through the operation of two principles—the accumulative and inventive,—that additions are made to the stocks of communities. It would contribute something to accuracy of phraseology, and therefore to distinctness of conception, to distinguish their modes of action by the following terms.

1. Accumulation of stock or capital, is the addition made to these, through the operation of the accumulative principle.
2. Augmentation of stock or capital, is the addition made to them, through the operation of the principle of invention.
3. Increase of stock or capital, is the addition made to them, by the conjoined operation of both principles.

Accumulation of stock diminishes profits; augmentation of stock increases profits; increase of stock neither increases nor diminishes profits. (Rae-Mixer, Sociological theory of capital, p. 203)

社會の資本の増殖するは二個の原則の作用による。一は蓄積の原則にして他は發明の原則なり。用語の精密從て概念の精確を得ん爲め其作用を次の如く區別す可し。

- 一 資本の蓄積とは蓄積の原則の作用により資本の増加するを云ふ。
  - 二 資本の擴張とは發明の原則の作用による資本の増加を云ふ。
  - 三 資本の増殖とは以上二個の原則の結合作用による資本の増殖を云ふ。
- 資本の蓄積は利潤を減少す資本の擴張は利潤を増加す資本の増殖は利潤を増減することなし。

レーが茲に蓄積の原則を云ふものは通説に於て資本形成の唯一の行程を看做するものなり。然るにレーは之は唯だ勞働の新器具に體現するの謂にして純收益は之が爲めに却て減少するものなれば利潤は減少す爲し其の名けて發明の原則による資本の擴張を云ふものこそ新思想を體現するものにして之によりてのみ收益は増加す從て利潤も亦増すものなりと云へり。予は今レーの説の當否を評論せんとするものにあらず否



右の説の如きはレーの言其儘に之を受納し難きものと信ず。唯だ予はレーの説の結構を取つて以て予が言はんを欲する所を明かならしめんを欲するのみ。レーが蓄積發明二個の原則を以て共に資本の増加を惹起するものなりとするは彼が打破せんを企てる舊説を全くは蟬脱するを得ず未だ之に囚はるゝものにして抑も資本の増加を以て經濟發展の中心問題とすること抑も誤なり。故に予はレーの説に訂正を施し資本増加を喚起す蓄積の原則を經濟の發展を喚起す發明の原則との兩者を區別す可きものなりと信ず。今其意を詳述せんに資本は富の消費せられずして後來の用途に充てられたるもの、中に含まる可きは言ふまでもなきことにして現在の使用に充てず他日の使用を待つことを貯蓄と總稱する以上資本は貯蓄によりて形成せらるゝ云ふことは自明の理なり否『トルイズム』なり吾人の經濟上の觀察は此自明の『トルイズム』を得るも寸毫も擴張する所なし。況んや經濟發展の根源を説明せんとするに於てをや。レーが之を accumulation と名ひて augmentation にあらずを爲す甚だ當を得たり。マーシアルもまた

But were it not for the family affections, many who now work hard and save carefully would not exert themselves to do more than secure a comfortable annuity for their own lives; either by purchase from an insurance company, or by arranging to spend every year, after they had retired from work, part of their capital as well as all their income.

(第六版二百二十八頁)

と云へり。然り貯蓄は家族の爲めに圖り子孫の爲めに慮るを主たる動機を爲す、マーシアルの言ふ意味にての國民的富の増殖を圖る所以にあらず。さればレーは曰く

He who labors to provide the means of enjoyment to wife, children, relations, friends, pursues an end in some degree selfish. It is his own wife, his own children, his own relations, whom he desires to benefit. The fruits of the labors of genius, on the contrary, are the property of the whole human race. (p. 147)

妻子親戚朋友の爲めに享樂の手段を具へんと働く人は、或度までは利己的の目的を追求するものならずんばあらず。彼が利益せんと希ふ所は彼れ自身の妻自身の子自身の親戚なり。之に反し天才の勞働の果實は全人類の所有に歸す。

彼は之に續て天才の創造が發明の原則の根柢たる所以を説くこと甚だ詳なり。其論移

じて以て予が流通生活の意義を稱するものを説明するに足れり。雖も、今煩を厭ひて之を略す。

貯蓄による資本の蓄積は、獨り利己的なるのみならず消極的なり。一定の循環定式の外に出づること能はず。欲望—行爲—充足の行爲を平面的に延長して觀察するものゝみ若しも欲望の充足てふことが經濟生活の一切ならば、其發展は這箇貯蓄の一事に盡きたり。爲す亦不可ならじ。唯だ實際に於て其實なきを如何せん。自己を養ひ自己の眷族を養ふことのみによりて、經濟發展の力を生じ來ること嘗て之なきを如何せん。經濟の發展はレーの所謂 *inventive principle* 天才の創造によりてのみ喚起さる。貯蓄による資本の増殖はシユムペーターの言を以て云へば畢竟 *Datenveränderung* 『項目の變化』のみ予の所謂『行程の延長』のみ。

アダム・スミスは勞銀及利潤高低の理法を論ずる際甚だ趣味深き言を爲して、予が今言はんを欲する所のものを髣髴の間に道破したり。唯彼は其思想を一貫せず、後世の學者は彼に此言あるを殆んど忘れたり。此言は左の如し。(國富論第一卷第八章勞銀論の條)

It is not the actual greatness of national wealth, but its continual increase, which occasions a rise in the wages of labour. It is not, accordingly, in the richest countries, but in the most thriving, or in those which are growing rich the fastest, that the wages of labour are highest. England is certainly, in the present times, a much richer country than any part of North America. The wages of labour, however, are much higher in North America than in any part of England..... But though North America is not yet so rich as England, it is much more thriving, and advancing with much greater rapidity to the further acquisition of riches. (p. 71, Edition Cannan)..... "Though the wealth of a country should be very great, yet if it has been long stationary, we must not expect to find the wages of labour very high in it. (p. 73)..... It deserves to be remarked, perhaps, that it is in the progressive state, while the society is advancing to the further acquisition, rather than when it has acquired its full complement of riches, that the condition of the labouring poor, of the great body of the people, seems to be the happiest and the most comfortable. It is hard in the stationary, and miserable in the declining state. The progressive state is in reality the cheerful and the hearty state

to all the different orders of the society. The stationary is dull; the declining melancholy. p. 83)

労働の賃銀に騰貴を喚起すは國富の實際の大きにあらす、其の间断なき増殖なり。従て賃銀の最も高きは最も富有なる國よりも最も繁榮なる國即ち富の増殖の度最速なる國に在り。今日英國は北米の何れの部分よりも遙かに富めり、然るに労働の賃銀は英國の何れの部分に於けるよりも北米に於ける方遙かに高きなり。……………北米の富は未だ英國に若かず、雖も其繁榮は勝れり。従て富の増殖に於て遙かに大なる速度を以て進みつゝあり……………一國の富大なりとも其國にして長く停滞的狀態にあるときは其國の賃銀は甚だ高きを望む可からず。……………之を要するに労働する貧民國民大多數の狀態が最も幸福にして又最も安寧なるは、既に富の充實を得たる國に在らずして却て絶へず富を増殖しつゝある進歩的の國是なり。停滞的の國に於ては其狀態は困難なり、退歩的の國に於ては窮乏にあり。進歩的の國は事實に於て社會の一切の階級に取りて會心にして快活の國なり、停滞的の國に於ては不

快なり、退歩的の國に於ては沈鬱なり

今日實際の事實を以て之を例證せんには、佛國の現狀を獨逸の現狀とを比較するより蓄きはなかるべし。蓄積の原則の作用は佛國に於て甚だ大にして、其現に蓄積したる絶對的の富の額は極めて大なり。然れども佛國はスミスの所謂停滞的の國に近き狀態に在り。之に反し獨逸は最も進歩的の狀態にあり。而して其經濟發展の力何れに多きかは茲に絮説するまでもなし。佛國人口増加不振の原因の一は、却て其蓄積の原則の作用にありと云ふ不可ならず。

資本の蓄積的增加は經濟發展の動力たらず、唯其一手段たるのみ、根本の動力存せず、存するも大ならざるときは資本の蓄積的增加は何等の發展を喚起すること能はず、或は賃銀の増加或は利潤の増加と云ふは、畢竟發展の體現なれば、單に資本の蓄積加りたりとて直ちに之を關連して起るものにあらず、別に之を招致す可き發展の動力なかる可からず、アダム・スミスは之を髣髴の間に認めたり、雖も、只だ『進歩的』と云ふを以て満足し、何故に進歩的なりやの理由を説かず、故に原因と結果とを顛倒したるの感なきを得ず。勞

銀の上騰し若しは利潤の増加する状態を名けて進歩的こそ云ふなれ進歩的なるが故に上騰し又は増加す云ふは雨天なるが故に雨ふる云ふに似て用語當を得ず。吾人は雨ふるが故に雨天なり云ふ而して其雨ふるは何故によりて然るやを説明せざる可からず。レーの説はスミスに比すれば稍々詳細に入るもの、如しと雖も而も『發明的』云ふのみにては『進歩的』云ふと大差なし、『發明的』てふこの内容を示さざる限り其論漠然たり。スミスが progressive な云ひレーが inventive な云ふもの近來シユムペーターは *erschaffen* と名けたり。而も内容を盡さざるに至ては其説甲乙し難し。唯だ此等の警語を案出したる諸氏は其構思の間自ら眞意を寓するものありて之を道破せざりしのみ。スミス及レーの思想は其説の詳かならざりし爲め殆んど後世に影響を及ぼすこと能はず、經濟學の定型はリカルドの定めたるもの、み全盛を極めて殆んど今日に及べり。

唯茲にカール・マルクスありて別途の思索によりて經濟發展の眞意を喝破したり。マルクスの説は唯物史觀によりて尤も喧傳し後世學者のマルクスを論ずるもの皆先づ唯

物史觀論より始めざるはなし。然れども經濟學の立場より之を見れば彼が唯物史觀は其經濟學説の本體に寸毫も交渉する所なし之あるも之なきも彼の經濟學説は些の増減する所あらず。唯物史觀の主張は唯だ經濟的原因の重要を概言したるのみ其内容には少も觸るゝ所なし。マルクスの唯物史觀論正しきにせよ誤れるにせよ其經濟學説の正否は之と關連するものにあらず。予が茲にマルクスが經濟發展の眞意を喝破したりと云ふは其資本蓄積論窮困論資本社會崩壞論等によりて組立てられたる資本主義評論を指して云ふなり。元より彼が説の一端に就て見るべきは誤謬脱漏甚だ妙しと爲さず(資本制生産云ひ資本主義云ふ其意甚だ漠然たることも亦一の缺點なり)。然れども貯蓄による循環定式的思想を一擲し嚴密に經濟社會の理法を考察し其中に自ら發展の動力あり原則あることを喝破したるに至ては前人未だ啓發せざりし所たるや疑を容れず、而してレーは此の意味に於てポエムバヴェルクの前驅たると同時にマルクスの前驅たりと云ふ大過なし。マルクスの研究は近くゾムバルトありて更らに之を擴張して今に於て之を祖述し之に附和する學者甚だ多く、而して最近に至りてはヒルファチングありて

其『金融資本論』に於て更らに其誤れるを訂し其正しきを宣揚したり。シユムペーターの『經濟發展の理法』并にリーフマンの諸種の近業亦其影響を受けたるものとす。

\* \* \* \* \*

シユムペーターは經濟生活に靜的と動的の二ありとし前者は享樂を以て主眼とし後者は發展を以て主眼とす云ひ *statisch-hedonistisch* 及 *dynamisch-energetisch* の名を下せり。近來の經濟學に於て『自足主義』と『營利主義』とを對立せしむること語は大に異りし雖も意は即ち相似たり。畢竟するにレーが蓄積の原則と發明の原則とを區別したる根本の思想と契會する所あり、ゾムバルトがマルクスの説を承けて *Bedarfsdeckungswirtschaft* 及 *Erwerbswirtschaft* の別を立てたるも其理多く異なる所なし。言語の末に就て相争ふときは此等皆千里の差を生ず可しし雖も真相を捕捉するときは歸着する所は一のみ。否シユモラーが其の衝動論に於て各種の衝動を列舉し最後に『營利の衝動』なるものを數へたるも亦自ら其の間の消息に通ずるものなりと云はざるを得ず。更らに溯りて研究するときは其の根本の思想は遠くアリストテレスにあり。彼の所謂『エコノミ

ック』と『クレマチスチック』、『自然なる經濟生活』と『不自然なる經濟生活』の區別論即ち是なり。欲望ありて行爲を動起し茲に欲望の満足を得て完結するものは『エコノミック』なり、『自然なる經濟生活』なり、レーの所謂貯蓄の生活なり、ゾムバルトの所謂『所要充當經濟』なり、近來の經濟理論に所謂自足主義なり。其反對に立つものは『クレマチスチック』なり、『不自然なる經濟生活』なり、發明の原則なり、營利經濟なり、動態經濟なり、『エネルギーズム』なり。今此等諸種の異稱を一括して予は前者を有限の經濟生活とし後者を無限の經濟生活と爲さん欲す。アリストテレスは限あり足ることを知るを自然なる經濟とし限なく足ることを知らざるを不自然なる經濟とし前者を揚げ後者を貶せり。營利と非營利とは現今の經濟生活に就て見れば粗ぼ其真相を道ひ得たるが如しし雖も、言語の末のみに就て解釋を下す時は人を過るの虞あり、畢竟營利なる概念を以ては右の區別の全般を道ひ盡し得ず、又其概念には他の關係少き事情をも包含するが故に出來得る限り之を避くるを可とす。求むる所に制限なきもの（即ちゾムバルトの謂ふ如く量と質との上）に何等の限界なきものと求むる所に早晚限界あるもの

是れ兩者の根本的に相分るゝ所なり。通例營利の事は制限なきを常とすれば、無限なるものを呼びて營利的と爲す、一應は差支なきに似たりと雖も、現に之に關連して甚しく煩雜なる論争を惹起したる例もあれば讀者細密の注意を須ゆ可きなり。國民經濟雜誌に掲げたる拙文「ゾムバルトよりマルクスへ」并に同所に引用せる關上田坂西三氏間の論争文を參考せよ。三氏は唯だ營利と所要充當（此語を欲望充足とせし予が誤譯は三氏共に之を訂正せず、今自ら改む）との兩語に囚れてクルツプ等の例に就て綿密なる論争をなせり。而して根本的區別の標準たる量と質との有限無限に就ては全くゾムバルトの眞意を傳へず、況んやマルクスをや。本文を讀みて後三氏の論争を看ば讀者或は意に當るものあらんか。

何故所要充當の經濟は有限にして營利の經濟は無限なりや。此理を究むるときは流通生活の意義と經濟發展の眞相とを明かならしむるを得可きなり。欲望—行爲—充足の循環定式の中に運行する經濟には、初より欲望の一定量あり、從て其生ずる價值亦一定量あり、此欲望を充足すれば即ち百事休す、欲望を充足して餘あるか、又は其充足を抑制して餘剩を生ぜば茲に貯蓄起るのみ、他に何も存することなし。故に量に於ても質に於ても一定の限度あるなり。クルツプの註文生産云々之に反し營利の經濟は欲望—行爲—充足てふ循環定式の中に行はるゝものにあらず、即ち初より充足せらるゝを必ずる一定量一

定貨の欲望ありて之によりて發動するものにあらず、全く別箇の動因を有す。シユモラの衝動常に唯だ益々向上せんとし増殖せんとし、足りることなく厭くことなき augmentation があるのみ。スミスは故に之を progressive と名け、シユムペーターは生々主義 *Energismus* と名け、ローは inventive と名け、マルクスは資本的と呼び、ゾムバルトは營利主義と云へる皆是なり。即ち始より何等の制限限界あることなきなり。流通の生活は、即ち此制限なく足ることを知らず厭くことを知らざる生々の進歩的發明的の經濟生活なり、而して經濟の發展は獨り此經濟生活あるによりて其自らの動力を有す。故に欲望の充足と其殘餘の貯蓄による資本の形成とのみを問題とする項目論の研究によりて之を究むること能はず、此定式を打破して別に其自らの理法を索出せざる可からざるなり。近來學者往々にして生産と營利とを對立せしめて、稍此間の消息に通ずるが如き説を立つるものありて、一應は人の信服を購ふに足るものあり。其所謂生産とは、技術的行程を顧慮の中に置くものにして、項目に束縛せられたる欲望—充足の定型に充當したる經濟生活の活動を總括し、營利とは項目と定型とを打破したる發展的經濟活動を指稱するが如し。然れども

此の如きは用語の拙なるものにして偶々構思の精到ならざるを自ら語るもの云はざるを得ず。定型の中に行はるゝ活動は生産のみに止らず發展の活動は營利の一語を以て盡し得るものにあらざるを記せよ。フキリツボグキツチの説猶ほ大阪銀行通信錄掲載津村博士論文「生産と營利」を参考せよ。

以上各種の術語錯綜して甚だ繁雜の觀あるを免れず、雖も簡單に之を云へば有限の經濟生活と無限の經濟生活との別あるのみ。前者に於ては價値の循環あれども發展は之れあることなし後者に於ては價値の流通移轉に基く發展あり。故に前者を循環生活 *Kreislauf* と呼び後者を流通生活 *Umlauf* と名く。彼の自足經濟と營利經濟とに別つは一其本質を言ひ盡さず。二歴史的に人類生活を二分し前半を前者に充て後半を後者に充つるの誤に陥るが故に取り難く、又マルクスが非資本的と資本的とに區別したるは一循環生活に資本なきが如き誤解を惹起し。二歴史的顺序に前後あるが如く思はしむるの憂あるが故に亦た服す可からず。而して此兩者を混淆して自足經濟を非資本的營利經濟を資本的と看做すに至ては、理路紛糾百の失ありて一の得なし斷然捨てざる可からず。欲望充足の外一の能事なき非營利的、自足的な生活にも資本はあり、欲望充足の生活を

目して自足的と爲すは不當ならざるも之を非營利的と爲すことは事實を誣ゆるも亦甚し。手工業を目して營利に非ずと爲すが如き曲説は此誤より出づ。甚しきは近世の所謂資本的企業に非ざるものは皆非營利的なりと至る曲解も茲に至つて極れりと言ふ可し。是等畢竟する所、文字の末に拘泥して其依つて言ひ顯はさんとする眞意を没却するものなり。

予は屢々經濟の發展又は價値の發展と云へり。凡そ人類社會に於る發展は大別して一内より來るもの、二外より來るもの、二に爲すことを得。經濟の發展に就ても亦然り、政治上の原因によるものあり、宗教上の原因によるものあり、技術の改良進歩に基くものあり、是等は皆外より來る發展にして、經濟其もの、内より來るにはあらず。予が茲に經濟發展の理法を論ずるは此等外來的のものを云ふにあらず、經濟生活其もの、中に存在する動力の作用して起る發展を云ふ。價値の發展と云ふ亦經濟價値其もの、内に存する原因より來るもの、を云ふ。循環の經濟生活にも發展は元より之あり、唯其

凡ては外來の原因に基くものにして循環場裡に内在する發展の動力なるものなし。之に反し流通の生活は其自らに發展の動力を包含す故に予は流通論は經濟學獨得の領域なり云ふ。一切の流通現象が發展の行程なるにあらざるは勿論なれども發展の動力なるものは此流通の生活を措いて外に存することなし。故に流通は價値の發展の謂なりを概言して大過なし。流通生活の意義は此くの如し然らば流通生活に内在する其自らの動力は何ぞや。請ふ章を改めて之を説かん。

## 第二章 補論

ジョンソンの書原名左の如し。

John Rae,

Statement of some new principles on the subject of political economy, exposing the fallacies

of the system of free trade, and of some other doctrines maintained in the "Wealth of Nations".

Boston 1834.

此書流布の本甚だ少し予は我邦に於ては瀧本誠一博士の架上に一本あるを知るのみ。然るに米國ヴァーモント大學のミックスター教授之を憂へ千九百五年此書の重刷を試み書中の章節を著しく轉換して讀易からしめ且つ書名をさへ新たに命じて出版したるものありて今は誰人も容易に其書を手にするを得ることなれり。其書名左の如し。

The sociological theory of Capital being a complete reprint of the new principles of political economy, 1834 by John Rae.....edited by C. W. Mixer. New York 1905.

此書にはレーの略傳をも附し卷末には原版本の頁數比較表をも添へたれば甚だ便利なり。予は此隠れたる深き思想家の書の洵く讀まれんことを希ひて已まざるものなれば本文中特に稍々多言を費やしたり。

本文中ゾムバルトの説云へるは其

Der moderne Kapitalismus I. A. Leipzig 1902. 2. A. 1916 3. A. 1919.



に述べたる所を指して云ふ。然るにゾ氏は近業

Die Juden und das Wirtschaftliche. Leipzig 1911. 2. A. 1920 (10—11. Taus.)

に於ては資本主義を以て猶太民族に特有なる民族的精神によりて起るものなりとの説を立て、前著の所説を殆んど根柢より覆へしたり。予は甚だ之を惜むものにして、前著は不十分なる箇所は多々なりと雖も、マルクスに基く研究の少き今日大に尊重す可きものなるが、新著は餘り深からず又た精しからざる構想の上に築かれたるもの、如く變説は却て退歩なりと認むるものなり。後者の梗概は國民經濟雜誌に大西氏の紹介文あり就て看よ。

ヒルフアードの書原名は

Rudolf Hilferding,

Das Finanzkapital. Eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus. Wien 1910. 2. A. 1920.

にして最も注目し値する新著なり。

リーフマンの近業は

Robert Liehmann,

Die Entstehung des Preises aus subjektiven Wertschätzungen. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. 34. Heft 1 & 2.

Grundlagen einer ökonomischen Produktivitätstheorie. Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik.

III. Folge. 43. Bd. 3. Heft. März 1912.

の二種の雜誌論文 (第二文は國民經濟雜誌に邦譯を掲げありしと記憶す) 并に左の新刊の小書なり。

Die Unternehmungsformen. Stuttgart 1912. 2. A. 1921. 3. A. 1923.

猶氏は

Theorie des Volkswohlstandes.

なる書を大成して右等論文に述べたる思想を更に布演して經濟理論の根本的革新を促さんとする由私信に於て報せられたり。此書今一九二四年八月までは未刊にして、今後恐らく其刊行を見ることなかる可きが如し。

予は大に氏の説に服す。國民經濟雜誌に掲げて未完なる予の『餘剩價值論梗概』は右等の論文を見ざる前執筆し、而して全篇の大要は心理學會に於て講述し置きし所なるが、間もなく氏の論文に接して予の考へ居りし所を多く符節を合はすものあるに驚きたり、而して氏は更らに予が未だ考及ざりし所を道破せり。讀者氏の諸文を『心理研究』に掲載したる予が右講演の大要を比較して之を知られよ。此稿を終へて後、更らにリーフマン第三論文に接す。

Theorie des Sparens und der Kapitalbildung. Schmoller's Jahrbuch. 1912. Heft 4.

是なり。此文に於てリ氏は單に消費を差控へて蓄積するは貯蓄にあらず退藏（テサオリーン）なりとし、資本形成の目的を附與せらるゝもの、即ち新たに現實の生産に充用せらるゝものゝみ貯蓄なりとせり。然れば予が本文に循環生活に於ける貯蓄を名けしもの之を退藏と改め、後段言ふ所發展的充用の場合をこそ貯蓄とするの可なるに似たり。用語は假りに通説に従ふとしても、言はんとする眞意のり氏と殆んご異なる所なきを發見したるは會心の至なり。本文執筆後、リーフマンは尨大なる大冊『國民經濟學原論』を

著し、極めて最近には、更らに其説の梗概を述べたる『一般國民經濟學』なる小冊を公けにせり。其書奇抜にして獨特なる構想を述ぶること誠に予が本文に於いて期待したる所の如くなり、雖も、又同時に意外なる無益の論争、殊に同僚ヂール其他に對する罵倒の文字を滿載し、爲めに論旨の徹底を妨ぐる甚し。其論ずる所一方に於て慥かに天才の面影を寓するに共に、他面精神に異常ある人にあらずれば發し得ざる底の冗漫無用なる節抄からず。氏は恰も予と同年齡の學者にして、未だ老朽の境に入れる人にあらず、或は恐る、氏の宿痾は氏の精神に累を及ぼしたるにあらざるかを。予は衷心より之を痛惜するものなり。右二書の原名左の如し。

Robert Liehmann, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. I. A. 1919. 2. A. 1920 u. 1922.

Allgemeine Volkswirtschaftslehre. 1924.

更らに又た予が近時の思索を著く刺戟したるものはシムムペーターの新著なり。予は靜態動態の名稱こそ取らざれ、流通生活てふことに思及んで經濟學教科書に其の大要を述べたるとき、氏の新著は未だ存せず。然るに後之に接するに及んで予は苦思幾度を

もして未だ透過し能はざりしもの氏によりて痛く策進せられたり。讀者は氏の書を取りて予が説の足らざるを賈むるの用に供せよ。

『ゾムバルトよりマルクスへ』の拙文は續稿せざる積なり。故に本章以下述ぶる所を以て彼の文に接續するものを見られんことを乞ふ。關上田坂西三氏に答ふる旨も亦自ら此中に在ります。

附記。予が本編公刊後數年大正十二年頃河上博士と予との間にマルクスの資本主義行詰り論に關して討論を重ねたることあり。即ち予は本章中に述べたる趣意を布演し更にトウガンバラノフスキーの説に參酌して『資本増殖の理法と資本主義の崩壞』と云ふ論文（今拙著『社會政策と階級闘争』に収録す）を『改造』に寄せたるに對し、河上博士は初め『我等』に於て後に其の獨力刊行せらるる『社會問題研究』數號に亘る長大の論文に於て再三或は自説を述べ或はローザルキセンブルグの『資本の蓄積』を援引して駁撃を加へられたり。河上博士は予の説を以て悉くトウガンバラノフスキーを祖述するもの、如く解せられたり。其の然らざることは、トウガンに何等關係なき本章

に於て既に已に明かに本文の如く論じ居るに徴して明白なる可し。而して博士と予との討論を讀まるゝ讀者は予の説の抑も依つて基く所が本章述ぶる所に在ることを諒解せられんことを希ふものなり。

### 第三章 流通生活の動力

流通生活の動力とは流通生活の内に存在し、外來の力を待たず、其自らに於て經濟生活の發展を喚び起す原因たる力を云ふ。而して今日の經濟生活に於て此動力を體現するものは企業なり。企業は流通生活に内在する發展の動力あるより起り、此動力は企業てふ組織に體現せられて發動す。シュモラーは此動力を營利の衝動とし、ゾムバルトは之を資本的精神と稱す。之に代へて營利心又は企業心と云ふことあり。然れども此等の造語は單に警語として之を用ゆるは一向差支なかる可し。雖も之に學理的正確を

望むこゝ能はず、況んや其衝動を云ひ心を云ひ精神を云ふものを心理學的に解剖することをや。されば此等の半心理的用語を以て、企業の本質を説明し盡さんことは甚だ困難にして、營利の衝動によりて支配せらるゝ、經濟形態は營利經濟にして、企業は即ち營利經濟なり云々の説には若干不精確の點あるを免れず。ゾムバルトは力又は動力 (Treibende Kraft) なる語の甚しく濫用せらるゝ、實例を擧げて之を非難しながら、自ら又同様の非難を辭するを得ざる説を下せるものと云ふ可し。茲に云ふ動力には、心理的方面と物質的方面と兩乍ら存せり、單に之を心理的現象として取扱ふは不可なり。其一切を經濟的事實と認め、殊に流通生活の本質に於て統一的にして内在的原因たることを先づ明かにしたる後にあらざれば、如何にして此動力が企業に體現せらるゝ、やを知るこゝ能はず。假りに一步を譲りて此動力を目するに衝動を以てするも、其衝動は他の根本的衝動例は生存生殖の衝動の如きとは趣を異にする複雑のものたることは争ふ可らず。されば單純なる衝動が複雑なる衝動となることに就て仔細の説を聞きたる上にあらざれば、營利衝動の論は之を受け納るゝ、こゝ難し。營利經濟と近世の企業とは連結し、衝動論を以て

其特徴を云ひ顯さんとする企てには若干の矛盾を包藏す。經濟發展階段を作爲するによりて著しく歴史上の事實を曲用するの嫌あることは今茲に細論するを要せず。畢竟分類の一目瞭然たるを得んことに急なるの餘り、牽強附會に陥るものにして、之を匡さんには先づ流通生活の動力に就て出來得る限り先入の見解を捨て、其體現たる企業の本質を十分に理解するより先なるはなし。

流通經濟の動力は流通生活あるによりて始めて之を認め得可きものなり。即ち社會的結合としての流通起るにあらざれば、此動力は發動せず、孤立したる交換の現象ありと云ふのみにては、社會的結合としての流通を認む可からず。經濟單位が分業によりて愈愈縮少し、愈々獨立し、私有財産の制度益々發達するに及び、交換は偶發的の行爲ならず、間斷なく斯く分化せる單位を社會的集化の下に置くに至りて始めて流通あり、始めて社會に於ける人々との間に價值の發展を期する諸種の移轉流通あるなり。ヒルファアデングは克く此理を説きたり。其一節に曰く、

Anders die Gesellschaft, die dieser bewussten Organisation entbehrt. Sie ist aufgelöst in voneinander-

der unabhängige Personen, deren Produktion nicht mehr als Gesellschafts-, sondern als ihre Privatsache erscheint. Sie sind so Privateigentümer, die durch die Entwicklung der Arbeitsteilung gezwungen sind, miteinander in Beziehung zu treten; der Akt, in dem sie dies tun, ist der Austausch ihrer Produkte. Erst durch diesen Akt wird hier, in der durch Privateigentum und Arbeitsteilung in ihre Atome zerschlagenen Gesellschaft Zusammenhang hergestellt. Nur als Vermittler des gesellschaftlichen Zusammenhanges bildet aber der Austausch den Gegenstand theoretisch-ökonomischer Analyse..... Wenn daher Marx einmal sagt, innerhalb des Austauschverhältnisses gilt der Rook mehr als ausserhalb desselben, so kann man auch sagen, innerhalb eines bestimmten Gesellschaftszusammenhanges gilt das Tauschverhältnis mehr als innerhalb eines anderen. Nur dort, wo der Austausch erst den gesellschaftlichen Zusammenhang herstellt, also in einer Gesellschaft, in der die Individuen durch das Privateigentum und die Arbeitsteilung, einerseits getrennt, andererseits auf einander angewiesen sind, erhält der Austausch gesellschaftliche Bestimmtheit, muss er die Funktion erfüllen, den gesellschaftlichen Lebensprozess möglich zu machen. (Finanzkapital, SS. 2-3)

不譯

意識せられたる組織を缺く現社會は右（共產社會）に異なる。此社會は相互獨立せる人格に分解せられ、其生産は社會的事件にあらずして、其人々の私事なり。各人は夫々に財産私有者たり、唯だ分業の發達によりて、相互の間に關係を結ぶべく強制せらるゝのみ。而して此關係を結ぶ行為は、即ち各自の生産物を交換する是なり。其行為によりて、始めて私有財産と分業とによりて、其原子に分解せられたる社會に連絡を生ずるを得るなり。交換が經濟理論の對象たるは、此くの如き社會的連絡の媒介たるべきのみ。..... マルクスは嘗て交換關係の中に在つては、一財は其以外にあるよりより、多くのものとして通用すま云ひたるが之と同じく一定の社會的連絡の中に在ては、他の社會的連絡の中に於けるより交換關係はより、多くのものとして通用すと云ひ得可し。交換ありて始めて社會的連絡生ずる所即ち各個人が一方には私有財産と分業とによりて分解せられつ、他方には交換ありて連絡せらるゝ社會に於てのみ交換は社會的特性を取得し社會的生活行程を可能ならしむ可き機能を果さざるを得ざることをなるなり。

(金融資本論二―三頁)

ヒルファードンツが茲に交換と云ひ交換關係と云ふものは、争が流通と云ふものに粗々

同じ。社會的集化の行爲としての常住的連續的交換の總體は即ち流通なり。此意味に於ての交換流通起り、一切の財、一切の働きは此流通場裡に提出せられて價值對象となるによりて、始めて此價值行程の發展、其發展の動力を認むるを得、常住的連續的の流通生活なければ、財、働が社會的に價值付けらるゝ、ここあらず、社會的に價值付けらるゝ、ここなければ、經濟生活其自らよりする價值の發展なし、價值の發展なき經濟生活は、唯外來の力を待て發展することあるのみ、其自らよりする發展は決してあることなきなり。マルクスの語を以て云へば、斯くの如き經濟生活には *Use* (財) あるのみ、*Ware* (商品) あることなし、*Arbeitsprozess* (勞働行程) あるのみ、*Verwertungsprozess* (價值行程) あることなし。他の語を以て云へば、欲望の充足、勞働行程、直ちに联接し、其間に企業の存立するを許さず。更に詳しく云へば、必ずしも營利の衝動資本的精神の有無を問ふに及ばず、發展の動力の發動す可き餘地なきなり、動力其ものゝ存在するや否やの問題は毫も考究の必要なきなり。營利の衝動云ふが如きものが、或時代に至りて突如として起るこの想像は、全然非論理的の獨斷にして、安全なる論斷を下さん、欲せば、此くの如き動力は何れの時

代何れの社會何れの民族にも存在したるなる可し、思はざるを得ず。唯此動力が潛勢力たるに止る時、之が現勢力となる時との間には、包圍の事情に相違あり、云ふを以て、足れり、す。一方に於て分化しつゝ、他方に於て集化する社會發展 (經濟生活其自らより來る發展、混同す可からず) の或程度に達したる、き、潛勢力たる流通生活の動力は、現勢力となり得る、刺戟を得たり。其刺戟は交換流通の普及、即ち交換經濟の成立是にして、其成立はまた貨幣經濟の成立、同時なり、故に諒解を便ならしむる爲めに、其刺戟は即ち價值の貨幣化なり、云ひて、差支へなく、流通生活、其動力の本質の説明の前提として、茲に貨幣、貨幣價值の概念を置くの甚だ適切なるを見るなり。依つて流通生活は、貨幣あるによりて始めて之を其自らに完き一の生活として考ふるを得るものなり、こ定めて、大過なきを覺ゆ。従てまた、流通生活の動力は、貨幣價值に於ける其發現に於て始めて學理的解剖を下し得可く、其發現なきものは必ずしも存在を否定す可きにあらず、唯之を捉へ來りて學問研究の題目と爲す能はざるのみ、知る可し。然るに貨幣價值に於ける發現は、甚だ顯著なる特徴を帶ぶるものにして、其以前、其以後、は歴史的に截然たる

二個の時期を劃するを要する程なり、即ち自然（又は自足）經濟と貨幣經濟との別は學問上不可動的定説となれるものにして、而して貨幣價值に於ける發現は、資本の形態を執るに至りて更に著しき故に、茲に資本主義資本制經濟等の概念を立つること甚だ必要なりやの觀あり、貨幣的なることの最上段は資本的てふことを以て最も的確に云ひ顯はさるる認めらるゝなり。從て營利的てふことは當然資本的てふことに歸着す可きが如くに考られ、ゾムバルトの有名なる資本主義論を産み出すに至れり。今此經過を冷靜に考察するときは其間若干の論理的間隙あり、ゾムバルト并に其同説の學者は其間隙を言語の威力によりて除却し得たりと認むるものゝ如し。大體に於てゾ氏の説は妥當を失はず、之を言顯はすに痛快にして力強き言語を以てしたるが故に、人を服することは誠に其の處なりと雖も、其が爲めに綿密なる區別を蔑視せしめたるの嫌あるを免れず。前掲上田博士論文に見えたる所にては博士は此間隙に注意を拂ひたるものと云ふ可し。而してゾムバルトの一切の『シエマチック』の依つて出づるマルクスの説を吟味するときは、此間隙は更らに一層大なるものならずやとの感を生ずるなり。原始社會に交換ありや否やの問題は、交換の意義を本文の如く解するときは、其解決左まで困難ならずと云ふ可し、猶米田博士の諸

文を參考せよ。

マルクスは  $W-G-W$  の行程と  $G-W-G$  の行程の對立に甚だ細密の注意を拂ひたるは人の能く知る所なり。然れども此對立と價值論の關係に就ては今日までの所詳解を下したる説あるを聞かず、ゾムバルトの如きマルクス學者にも亦た之を見ざるは奇と云ふ可し。經濟生活の  $W$  を以て開始するものと  $G$  を以て開始するものは今茲に論ずる流通生活の動力と其體現たる企業との真相を窺ふ上に於て、重大の關係を有する差別なり。左右田博士『經濟法則の論理的性質』及『貨幣と價值』の二書に於ける根本の思想と、茲に云ふ所と若干關係あり、唯博士は之を論理の問題として取扱ふも、茲には純然たる經濟理論の問題と見做すべし。此差別の餘りに重大なるが爲めに、自然經濟對貨幣經濟の差別論は、獨逸の經濟理論に於ては夙に著聞し、歴史的傾向を有する學者は殆ど一切の立論を茲に安置せん。然れども貨幣經濟なる歴史的時期に於ても  $W-G-W$  と  $G-W-G$  の兩個の行程は並び存せり、唯之が予の嘗て試案せる  $B-S-W, W-S-B, S-W-B$  と相異なる點は何れの時期に於ても之を認む可きのみ。經濟學講義本全集前段二九五頁以下に論述は、今茲に於て始めて其全體の關係を明かにするを得る。此試案を載せたり。彼處に於ける予が論述は、今茲に於て始めて其全體の關係を明かにするを得る。流通の動力は此等凡の行程

に於て存在する者なる可し。雖も私案の三行程其何れを取るにせざるも、欲望一行為一充足の循環定式を廻轉する間は、其動力は發展の動力ならず、唯循環の原因之を動力と名けても差支なしたるのみ、然るにGの加入する行程に於ては、此は發展の動力として發動し、M—G—Mの行程に於て未だ顯著ならざりしも、G—M—Gの行程に於ては誰人の注意をも免るゝ能はざる程重要莫大のものとなれり。其故他なし、G即ち貨幣は此動力の全部を體現し、其自ら獨立の存在を確定すればなり。Gに始めてGに終る流通の生活は、其一切の原因と結果とを悉く貨幣化するにより、同時に流通の生活の全部を擧て唯此動力の表現たる觀を現ぜしめ、他の原因の作用は全く消滅するが如く見ゆ。之を營利と名け、其動力を營利の衝動と名くるとは、吾人の分類上の要求に打克ち難き根據を有するが如く考へらるゝなり。然りと雖も、吾人は此試惑に打克つことを要す。何となれば、吾人は先づ一切の根源に溯つて觀察し、歴史上の事實を玩弄すこの疑を出來得る限り解かざる可からざればなり。斯くすることはやがて企業理論に正確安固なる基礎を與ふる所以にして、而して又價值所得の理論を費用利用の葛藤より救ひ出す所以なり。經濟學が價值の學問なりと云ふ

意味は未だ確定の解説を得ず、貨幣を以て其論理上のphenonomenonなりとする説は一の提案として受け取る可し。雖も、未だ經濟理論の引離す可からざる一部分として設定せられたり云ふこと能はず。更らに進んで觀察するときは所謂文化價值なる造語も之を用て若干の運用を爲し得るに止り、之を經濟理論に編入するに付ては連鎖の缺陷あるを免れず。文化價值は如何にして存するや、其經濟生活に於ける意味は如何、貨幣を以て直ちに之と連結するとは果して當を得たりや否や、資本を以て之に代ゆるも差支なきにあらずの言必ずしも此れ當面の未解決問題なり。今予が今日までに得たる思想を概言すれば、吾人は幾多の試みを爲したるの後到底マルクスの嘗て試みたる所以上に出づることなきが如し、必ずしもマルクスの説が妥當なり又は的確なりとの意にあらず、大體の結構と輪廓とが彼によりて定められたりとの意なり。然れども彼の説を其儘に受け納れ之に施すに若干の修飾を以てするは宜しからず、ゾムバルトの短所は此點に於て到底否定す可からず。吾人は微力なる儘に最善を盡して之に根本的是正を加ふることを勉めざる可からず。



先づ誰人も直ちに知り得るとは、 $W-G-W$ の行程は質の上に於ける差違を持來すを以て其特色とする是なり。其差違は之を増進し見るも改良し見るも敢て問ふ所にあらず、兎に角其行程の主體に取りては行程を起さしむ可き原因は品質的變化なり。之に反し $G-W-G$ の行程は、全然量の上に於ける差違を持來すに止る、質の變化は之あるも妨げず之なきも亦た妨げず。されば此兩個の行程を一括して質及量の變化の行程を認む可く、之を繰返し繰返し間斷なく連續するに方りては質と量の變化の行程を打破するところが最上の要求たるを知るなり。茲に於て吾人は回顧せざる可からず。質と量の無限的變化換言すれば連續的増進又は改良は、 $G$ あるまなきとによりて如何なる關係を有するか。 $G$ は何故に此兩個の行程に入り來るや、如何なる必然的存在理由を有するや。

此問題は一部は心理的に、一部は論理的に解答するを要すると勿論なり、然れ共予は『デランチズム』を敢てせずして出來得る限りに於て解答を試みんむ。先づ此兩個の行程に於ける $G$ の意義を考へ見るに、其經濟上に於ける任務は欲望—行爲—充足の循環定式を分解する是なり、換言すれば欲望を充足の必然的連鎖を打破るとにして、貨幣

材料の何たるを問はず、

『メタリズム』の説を取りても可なり

『ノミナリズム』の説を取りても可なり

貨幣の介在する事實は、欲望の世界を充足の世界を或程度までは分化せしむるものなり。其自ら直ちに欲望充足の用なき

『貨幣に對する欲望』てふことを言ふとすれば此は問題外なり。

貨幣が一度又は二度經濟生活の行程に入り來ると云ふとは此意義を有す。さて質と量の改良増進は、欲望に對して云ふまじき

と量との改良増進とは欲望に對して云ふものなり、然るに欲望—充足の連鎖打破せられたる流通生活に於ては價值に對して云ふものにして、 $G$ あるまなきとによりて改良増進の觀察は眼點を一變す。然らば何故に $G$ は入り來るや。答、欲望に對して云ふ改良増進は欲望を限り、欲望を充たし得たる以上は、改良増進は吾人に取りて没交渉なり、欲望は固より無限なり、雖も其は $W-G-W$ 全體として見たるまじきことにして、經濟上に於ては利用遞減の法則が示す如く、一定の財又は働きに對して見るまじきは極めて有限のものなり、經濟生活の發展の要求は欲望—充足の循環を爲しつゝあるによりては充たされざるなり。茲に於てか此限界を撤回せんとの打克ち難き要求起り、 $G$ は此要求を充たす可く

入り来る。何となれば價值に對して云ふ改良増進は無限なればなり。シヨミ・ロツクは此理を夙に道破したる曰く

He that gathered a hundred bushels of acorns or apples had thereby a property in them; they were his goods as soon as gathered. He was only to look that he used them before they spoiled, else he took more than his share, and robbed others. And, indeed, it was a foolish thing, as well as dishonest, to hoara up more than he could make use of. If he gave away a part to anybody else, so that it perished, not uselessly in his possession, these he also made use of. And if he also bartered away plums that would have rotted in a week, for nuts that would last good for his eating a whole year, he did no injury; he wasted not the common stock; destroyed no part of the portion of goods that belonged to others, so long as nothing perished uselessly in his hands. Again, if he would give his nuts for a piece of metal, pleased with its colour, or exchange his sheep for shells, or wool for a sparkling pebble or a diamond, and keep those by him all his life, he invaded not the right of other; he might heap up as much of these durable things as he pleased; the exceeding of the bounds of his just property not lying in the largeness of his possession, but the perishing of any-

thing uselessly in it.

And thus came in the use of money; some lasting thing that men might keep without spoiling, and that, by mutual consent, men would take in exchange for the truly useful but perishable supports of life:.....

Thus, in the beginning, all the world was America, and more so than that is now: for no such thing as money was anywhere known. Find out something that hath the use and value of money amongst his neighbours, you shall see the same man will begin presently to enlarge his possessions.

John Locke, Two treatises of civil government. Routledge edition. pp. 214-215. Works. 12 th edition. 1824. Vol. 4. pp. 365-366. § 46. 47. 49.

文意簡明なるにより邦譯を加へず、猶三田學會雜誌掲載拙文『シヨミ・ロツクの私有財産制度論』拙著『經濟學研究』三一四頁に收むを參考せよ。

セドグーの行程は今日の企業に於て絶好の代表者を得たり、殊に有價證券の普及

したる所謂 Eftektenkapitalismus 『證券資本主義』と株式會社に於て此行程は高度の發達を遂げたり。此行程は一切の經濟價值を分量化す、分量化せられて價值は一切の羈絆を脱し最も自由にして無限なる發展を爲すことを得るに至る。貨幣價值の意義は文化價值の分量化にあり、生活の動力は此分量化によりてまた最大の活動を許さる。繰返して云ふ、此動力はGの分量化によりて始めて存在を得る云ふに非ず、唯だ其發動活潑々地を得たりとの意なり。以上論じ來りて、茲に予が云はんを欲する最終の題目に到達す。此題目を始めに掲げずして、却て終に置く所以は、豫め若干の矛盾を妨害を取り除くにあらずれば、適當の諒解を購ふこと能はずと信じたればなり。其題目は他なし、餘剩價值即ち是なり。

今日の流通生活の動力は、經濟學に稍々久しく知られたる餘剩價值の語を以て指稱すること不當ならずと信ず。唯豫め明かにし置く可きは、予の用法必ずしもマルクスの其れと一致するものにあらず、又たタムソンの意味とも同じからず、文字其の儘に解釋したる價值と價值との較差たる餘剩の意味に於てするものなること是なり。リーフマンは

之を Ertrag と名け、マシーナルは或は Surplus と云ひ或は Benefit と云ひて稍々類似の思想を言顯はすに充てたり。或はまた餘剩利用 Surplus utility なる語を鑄出するとも差支なきが如し、米國の學者中にはバツテンの Theory of prosperity の如き之に近き思想を述べたり。唯だ予は其餘剩は價值と價值との較差なるが故に、必ず之を餘剩價值と稱せざる可からずと信じ、此餘剩を價值と認むるとは不可缺要求なりとするものなり。此意味に於ける餘剩價值の説は予既に久しく之を有し居たりしも、

明治三十七年餘剩價值論の著を企てたれども終に果たさず、唯其

一端を『經濟の本則と營利の主義』なる一文に述べ置きたるに止れり、但し餘剩を直ちに營利と混同せしは誤謬にして、ラムバルトの説に雷同したるものなり、今之れを改む。此餘剩價值を流通生活の動力と認むるに就ては數年の間疑を懷きて決せず、漸く最近時に至りて貨幣の概念と結合するにより、又た資本の本質と併せ考ふるによりて、粗ぼ確定の見解を得たり。管見或は未だ之を公けにするに適せざるやを思はざるにあらずと雖も、今企業理論に入るに就て、茲に其一端を述べて讀者の是正を待たんと欲す。

餘剩價值は價值の認識せらるゝ限り必ず併び存す、決して流通生活のみに特有なるに非ず、況んや今日の企業をや。然るに之を以て流通生活の動力なりと云ひ、企業は即ち餘

剩價值形成の組織なり云ひ、資本は餘剩價值を形成する目的を以てする私有財産なり云ひ、貨幣は餘剩價值の負擔者なり云はん、此點説明の必要あり。價值は數量にあらざ、從て價值と價值との較差云ふことは正當の用語にあらざ、價值と價值との比較は畢竟一の心理的行程たるに止る、尤も心理的作用を數量化して考ふることは此場合のみに限らず、精神物理學は優に存在の理由を確定したるが如し、雖も今茲に『デント』の爲に倣ふことを敢てせず。今日吾人が有する經濟理論に於ては利用を數量化せんとの企ては稍々成功したるが如くなれども、限界利用説の如き其最も顯著なるものさす之を取りて直ちに不動の定説とすることは躊躇せざるを得ず。故に價值と價值との比較を直ちに數量化することを敢てせず、唯品質上の比較に止め置くものとして、さて此場合に餘剩價值ありや否や云ふに、必ずありと斷ぜざるを得ず、唯だ其餘剩價值は數量を以て言顯はすこと能はざるが故に、之を知ることには困難にして、たゞへ知り得るも爲めに得る援助は甚だ微弱なり。マールシアルの消費者餘剩の説明が甚だ有益なる試にてあり乍ら、非難を免れざるは、ニョルソンの激しき反對論を參考せよ畢竟之が爲めなりと信ず。リーフマンは之を *Konsum oder Nutz-*

*ertrag* 名けて説明したれども、理論上の裨益は多大ならず。唯だ人は凡ての經濟行爲に於て、最小の費用を以て同一の利用、又は同一の費用を以て最大の利用を得て結局の餘剩を最大ならしめんとするものなりとの前提を維持する効あるに止る。而してリーフマンは價格の説明より、否な經濟學理論の一切より、價值の概念を放擲す可しと主張せり、是れ予を以て見るに大なる速断なり。餘剩の思想を博く又深くするに就ては、却て益々價值の概念を缺く可からず。猶此事は後段に詳論す可し

餘剩價值は循環生活にも流通生活にも共に存す、唯だ前者に於ては其が動力たることを認むるを得ず、後者に於て始めて明かに動力として認むることを得。其故他なし、餘剩價值は價值が貨幣化せらるゝによりて始めて數量的比較を爲すことを得其自らの世界を有するを得るによれり。されば煩を厭はずして精しく云へば、流通生活の動力にして企業に體現せらるゝは貨幣餘剩價值又は餘剩貨幣價值なりとす可きなり。

## 第三章 補論

ダーシヨルは其企業論の劈頭に生物學よりの類推を擧げて組織が經濟生活發展の上  
に及ぶ影響の偉大なるを説き、分化と集化との對照より分業と進化との關係に論及せり。  
曰く

Before Adam Smith's book had yet found many readers, biologists were already beginning to  
make great advances towards understanding the real nature of the differences in organization which  
separate the higher from the lower animals; and before two more generations had elapsed, Malthus'  
historical account of man's struggle for existence started Darwin on that inquiry as to the effects  
of the struggle for existence in the animal and vegetable world, which issued in his discovery  
of the selective influence constantly played by it. Since that time biology has more than repaid  
her debt; and economists have in their turn owed much to the many profound analogies which have  
been discovered between social and especially industrial organization on the one side and the physical  
organization of the higher animals on the other. (pp. 240-241)

右譯

ソグムスミンの書が廣く讀まるゝに至りし前、既に生物學者は高等動物と下等動物とを  
分つ組織上の差違の真相を諒解するに於て大なる進歩を爲す可く始めたり。而して二  
代を経ざる内にマルサスの人間生存競争に關する歴史的説明は、バルツキンを促して動  
植物界に於ける生存競争の結果に關する研究を企てしめ、終に生存競争が絶へず作用す  
る淘汰の影響に就ての發見を喚起するに至れり。爾來生物學は經濟學に負ふ負債を償  
却して猶餘ある成績を擧げ、經濟學者は社會的殊に産業的組織と高等動物の物理的組織  
との間に深き類似の點の存するを發見したるより得る所甚だ大なり。(二四〇・二四一頁)  
而して此くの如き類似の中精考を重ねるに及び其誤なるを見出したるものもありこ  
雖も、他方に新たに類似の發見せらるゝものあり、斯くて a fundamental unity of action between  
the laws of nature in the physical and in the moral world (物理界と道德界とに於ける自然の法  
則の間に存する活動の根本的一致) は最早疑ふ可からざる事實となり、

This central unity is set forth in the general rule, to which there are not very many exceptions,  
that the development of the organism, whether social or physical, involves an increasing subdivi-

tion of functions between its separate parts on the one hand, and on the other a more intimate connector between them. Each part gets to be less and less self-sufficient, to depend for its wellbeing more and more on other parts, so that any disorder in any part of a highly developed organism will affect the parts also.

右 譯

此の中心的一致は次の如き一般的法則によりて言顯され之に對する除外例は餘り多からず。曰く社會的有機體にても物理的有機體にても抑も有機體の發展は一方に於ては其各部の間に機能の分割増進すると共に他方に於ては其各部分間の結合一層密接なることを意味す。各部は愈々自足的性質を失ひ其の安寧の爲めに他の部分に依頼すること愈々多くなり其結果高度に發達せる有機體の何れの部分に於ける不秩序と雖も他の部分に影響を及ぼすはなきに至る。

是を名けて分化及集化 (Differentiation and Integration) シ云ふゾムバルト故に曰く分化の度は即ち集化の度なり。其意は經濟上に於て云へば經濟單位の分立愈々完きに從ひ經濟組織の範圍亦愈々擴張すと云ふことは是れなり。マーシアルは其の企業論を説き起す

に此點を以てし爾來氏の例を襲踏するもの尠からず。蓋し斯く廣汎なる基礎の上に立ちて企業の本質を論ずるは舊來の企業論に比し遙かに勝ることを疑ふ可からず。ゾムバルトの大著近世資本主義論の結構も亦斯くの如くにして今や殆んぞ學問上の通説とならんことを似たり。分化及集化の思想を産業組織に適用するは甚だ有益の企にして關博士の各種の論文能く之を代表せり。予嘗て經濟單位の縮小的發展は經濟組織の擴張的發展と相伴ふ所以を唱へ自ら見て構思當を得たるものごしたりき。

經濟學研究所收「經濟單位の發展に關する舊説と新説」なる拙文を看よ。 進化發展の思想は元シマルサ

スの人口論に源を發しダルウケンによりて自然界に適用せられたるものを再び經濟學に輸入し來り經濟進化論の説一時に喧傳せらるゝに及びブエヒアーの經濟發展階段説はシムモラーの類似の説と共に學界を風靡する勢を爲せり。

經濟發展階段のことは米田博士の諸論文最も有益なる參考資料なり。 元より今日に於ても此種の思想の大體に於て當を得たることは認めざるを得ず

雖も一方に於て専門歴史家の異論甚だ有力なる者あり他方に於ては進化發展の思想を自然界より直ちに經濟生活に移植するの必ずしも妥當ならざると認めらるゝに至り昔日の附和唱道は著しく其勢を殺がれたり。加ふるに附和の説に熱中する者が發

見する能はざりし缺陷は、其熱心冷却するに及べば顯著なるを免れず。只管に進化を説き發展を高調するに急にして、而して、又此發展を出来る限り一目瞭然たらしむ可き階段に分盛りせんことを餘り、區別なき處にも強て區別を設け、分類を要せざる者をも強て分類したるやの疑を免れ難く、歴史家先づ起つて歴史上の事實を玩弄する者なりとして抗論するに至りしは、慎重なる研究者を反省せしめたり。エルンスト・グロツセ嘗て予に語りて曰く、吾人歐洲人は今や進化發展思想に中毒せんことをしつゝ、あり此迷夢を醒すの任は之を歐洲以外の卓越なる學者に囑せざる可からず。是れ今より十數年以前の事にして、當時予は其眞意を十分に諒解する能はざりしも、其後歐洲學界の趨勢を見て予はグロツセが一場の閑話を追想せざる能はず。凡そ學問の上に於て類推考察ほご有力の方、法少しも雖も、亦た此方法ほご危険なるものも多からず。就中其藉り來る類推の資料が我學より遙かに進歩せる學問の範圍に屬するべき然り。社會學が生物學より有機體の思想を取り來り、之を縱横に類推したる結果如何は今細説する迄もなし、シェフレが其社會體の構造及生活、を第二版に於て著しく改述して、經濟理論に於ける組織論は、其研究の題目が社會學の、猶非難を辭し難き所以を考へ見よ。

題目と甚密接なる關係を有するにより、其陥りたる過も亦た社會學の陥りたるものと粗ぼ性質を同じうするは怪むを要せず。企業理論は此過の爲めに著しき影響を受けたり、思ふに向後の進歩は、先づ出來得る丈け此影響を脱することより始むるにあらん。予は先づ其必要を認めて微弱なる努力を此方面に試みんことを欲するものなり。

進化發展の思想の上に築かれたる經濟發展階段論の凡てを通じて免れざるは、今日現在の經濟狀態を其最高段に置かんことを要求是なり。從て歴史上の過去を按排するに、當然此狀態にまで昇り來る可き様の階段を設け、之に一切の事實現象を分け盛る者なり。即ち始めより現在を前提し置きて、之に適當なる事實のみを撰び出し、之を關係なき又は關係少き事實は捨て、顧みず、又た截然に階段を設くる以上、其一々に就て夫々特徴を明のにし、一段の特徴は他の一段の特徴とは必ず異なる者こそざる可からず。然るに實際の史實は必ずしも此要求に副ふものにあらず、一時に存して他時に缺くものも亦次に到れば顯著に活動し、如何に工夫を凝らすとも之を適當の時期に割り當つるを得ざるものあり。其最も著しき例は古代商業の事の如き是にして、ブエヒアの説に對しベロー、マ

イア兩氏始め極力反對し、延ては原始生活に交換ありや否やの大問題を生ずること、なれり。所謂有機的發展云ふことは豊富なる暗示を與ふるには相違なれども、他方に於て此思想に囚はれて歴史を玩弄すこの謬を免れざることあり。予の考ふる所にては此有機的發展の思想は大體に於て之を受け容るゝ、とするも、其解釋はベルグソンの所謂『創造的發展』 Evolution creative の意味に従ふによりて過に陥ることを免れ得可きが如し。少くも今茲に考究せんとする流通生活の動力としての企業の本質を明かにするには、ベルグソンの興へたる暗示は豊富なる諒解を供するもの、如くなれり。元よりベルグソン自らは其新説が社會科學に如何に適用す可きものなるやに就て何等の説を下さず、又近頃公言したる如く未だ此點に考へ及ぼし居らざるものなり、姑く之を執て經濟發展論の面目を修飾することは必ずしも不可ならざるに似たり。但し此事は別に論ずるを期して今は細説せず、唯予が構思の依つて基く所を一言し置くのみ。

右の見解よりして、予は經濟階段の設定を俄かに試むるを不可なりと信ずるものにして、材料の貧弱なるを顧みず、強て順序的發展を目前に展開せしめん、試む可きものにあ

らずと思へり。換言すれば、循環生活と流通生活を歴史的に時代付けざるを以て可なりと見るものなり。殊に交換の成立貨幣の起源に就て未だ一般に一致したる説に到達せざる今日、此くの如き企ては到底不可能なりと云はざるを得ず。されば流通生活其自らに存する動力は、人間經濟發展の或時期に於て突如として顯はれたるものにあらず、却て其存在を甚だ古きものと考へざる可からざるを思ふ。唯だ吾人が經濟史に於て其動力の存在と作用とを疑もなく認識するに至れる時期は、甚だ新しきものなるは否定す可からず。此と同時に此動力の發現の有様は、現に最近數十年の間に於て著しき變遷を経つ、あることも忘る可からず。

さて歴史的時期付けを考慮せずして、企業が流通生活發展の動力たる所以を概言すれば一言に盡く。曰く企業は創造なるが故なり、流通生活以外の創造は普通に經濟學に於て生産なる語の下に一括す、之に對し流通生活に於ける創造は獨り企業あつて之に任ず、他の一切の經濟生活は企業の創造を補助する手段たり又は機關たり、決して創造其事にあらず。企業は其創造によりて發展の動力たり、必ずしも有機的順序に拘泥せず。シユ



ムヘーターは企業を以て Energie (活力) Motivation (創意) を負擔するものなり云入り。予は此兩者は必ずしも分割するを要せず、創造即ち活力なりを認む可しを信ず。企業の創造あるにあらざれば流通生活に發展なし、流通生活に發展なければ外來の發展を待つの外なく、經濟生活其自らの内より起る發展は存せざるなり。

シヨンバーは Invention が富の進歩の原因なる所以を甚だ詳に論ぜり。曰く

Man is essentially imitative; his instincts impel him to amalgamate with the mass.....Nor, unless he look far beyond himself, is there any evident motive for his endeavoring to extricate himself from the overwhirling circle of which he forms a part. Hundreds of millions have preceded him; to learn and practise what they have left, is the direct road to his goods, pleasure, and honor. Why then should the individual waste the sweets of momentary existence, in rashly and needlessly tasking his feeble powers to form a new path, when one already exists, along which so many have trodden, and which their footsteps have beaten smooth?

It is necessary to premise, that for the present purpose, two classes occasionally confounded toge-

ther, must be kept apart. Real inventors, the men whom we have alone to consider, differ from mere transmitters of things already known.....Among the many vast consequences of the revolution, we overlook the small one of its occasioning the classing under one name, of those who are enlargers of the stock of knowledge, and those who are merely efficient communicators of portions of it. They are all successful authors, authors, that is, of books which are read.

\* \* \* \* \*

What is really new, has to encounter obstacles of two sorts. It is the nature of men to be copiers, and, with exceedingly few exceptions, they are nothing more.

\* \* \* \* \*

Men are so much given to learning, that they do not readily become discoverers.

\* \* \* \* \*

Invention is the only power on earth that can be said to create. It enters as an essential element into the process of the increase of national wealth, because that process is a creation, not an acquisition. It does not necessarily enter into the process of the increase of individual wealth, because

that may be simply an acquisition, not a creation.

Nor is there any thing in the appearance of human affairs, which should induce us to conclude that the increase of national capital ever does, in fact, proceed, unless in conjunction with some successful effort of the inventive faculty.

The principle of individual accumulation, as a means of advancing the national capital, has limits beyond which it cannot pass.

There is no avoiding the admission, that to every great advance which nations make in the acquisition of wealth, it is necessary that invention leading to improvement should lend its aid; and granting this, it necessarily follows, that we are not warranted to assume that they make even the smallest sensible progress without the aid of the same faculty. pp. 133—137.

ノの言移して以て循環生活の動力と流通生活の動力とを論ずるに供し得可し。與へられたる生産要素を結合して生産し生産の幾分を残して貯蓄する生活には發展の起るこゝろあらず唯だ之に發明的創造の加はるありて始めて發展を見進歩を見る可し。企業

は即ち此創造を意味す。其創造は物質的の意にて云ふにあらず價值の世界に於ける創造なり人は物質に一毫を加ふる能はず一絲を減ずる能はず唯價值の世界に於ては創造の可能は無限なり。發明云ひ發見云ふ皆之が價值の世界に於て考らるゝべき意味あり技術上の發明發見は之が價值の發展を喚起すによりて經濟上に適用を見るのみ然らざれば没交渉なり。マルクスが Umwertung シ云ひしは即ち是なり。價值の發展は人々人と交渉するにあらざるよりは之を見るこゝ能はず流通が價值の發展を意味すは即ち此意なりと知る可し。

猶經濟學研究に收めたる拙文『企業心理論』は本章の説により著しく訂正を加ふ可きものと知られたし。彼文は殆んゞ全くゾムバルドに附和したるものなればなり。

經濟發展の理を特に講究したるものに近くミツチエルヒあり。其の書名左の如し。

Waldemar Mischerlich, Der wirtschaftliche Fortschritt. Sein Verlauf und Wesen dargestellt an Hand der wirtschaftlichen Entwicklung von der Höhe des Mittelalters bis zu der neuesten Zeit.

Leipzig 1910.

之を邦譯すれば、『經濟的進歩。其の経過及本質、中世の終より最近代に至る經濟的發展に照して説明す』と云ふ。此書に於て氏はシュモラー及びブエヒアー兩氏の經濟發展階段論を紹介し且つ之に評論を下したる後、自ら都市經濟より國民經濟への發展の経過を叙述し、之によりて經濟進歩の理法を打出せん、と勉めたり。其研究の結果は殆んゞ何等創獨の點あるを認むること能はず、又た理論の上に於て格別寄與するものあるを見ず、と雖も、シュムペーター一流の着想が近來著しく學者殊に壯年學者の間に普及すること、を窺ふに好參考料たり。ミ氏は研究に三段を劃し、第一段は事實を蒐集し之を叙述することにして、主として經濟史及び純記述的經濟學の任なり、第二段は斯く蒐集し來りたる事實の材料より其特色的なるものを摘出し、之を因果的論理的聯絡の下に結合説明することにして、分解と抽象とによりて其目的を達す可し、第三段は斯く結合し説明したるものに付て其本質を發見すること、是にして、之には結合と直覺とを必要とす。然るに今日迄は此三段を十分に経過せず、學者其好む所長ずる所に從て各々偏りたる研究を以て甘

じたり。合理主義の行はれたる頃には第三段のみに偏し、十九世紀の中葉以後は他の極端に走せて第一段のみに研究を集中したり。三種の階段を仔細に経過したる研究は向後起らざる可からざる所なりと云ひて（以上一七一―一八頁、自家の執る所の態度は即ち然るを暗示す。然れども此の書を讀過して吾人の得たる感想を云へば、氏は其發言する所を甚だ不十分に實現したるに止り、眼高く手低きの謗は到底之を辭するを得ず。唯だ其第三篇『經濟的進歩の本質』の第一章（六八―一八二頁）に於て云ふ所は、予が本文に於て主張する所に暗合するものありて、聊か參考に資するに足る。曰く、經濟的進歩の本質を究めんには之を三個の方面より攻むるを要す。第一、經濟的進歩は如何にして起るや、第二、經濟的進歩は如何にして經濟生活内に入り來り、其中に普及するに至るや、第三、經濟的進歩は經濟者の範圍を一の單位に包含するに如何なる造營物を喚起し、如何にして之を維持し又擴張するや、是なりと。而して氏は其第一の問に答へて、抑も經濟的進歩の起る所以を詳論す。曰く、經濟的進歩の起るは三個の要素に依る。一人類の團集の經濟行爲、二人類を驅て進歩を爲さしむ可き經濟的事情、三、經濟以外の原因是なり。而して

歴史研究の結果は吾人に教ゆるに、一切の經濟的進歩が個人の創意 (Initiative einzelner Wirtschaftenden) より起ることを以てす。されば經濟的進歩其ものは、決して群集現象 (Massenerscheinung) にあらずして、各人の個人的行動の結果なり。唯だ群集が個人の創意を取りて己がものとなすによりて、經濟的發展の事實確認し得可きのみ。故に經濟的進歩は個人の行動の産物にして、經濟的發展は經濟者の全群集の行動の産物なりと云ふ可し。即ち氏は進歩と發展とを區別し、先づ個人によりて起るものは進歩にして、之が群集現象となるに及びて發展起ると云ふなり。而して曰く、經濟的進歩の起るには、天才的能才的個人の行動の必要不可缺こと、恰も藝術及び科學の進歩に同じ。氏は更に如此、天才能才の都市經濟より國民經濟への過渡時代、即ち企業勃興期に於ける地位を説いて曰く、

Diejenigen Menschen, die jetzt im Handel das Feld ihrer Tätigkeit aufsuchten, mussten über ganz andere Fähigkeiten verfügen, wie die Stadtwirtschaft sie gefordert hatte. Deshalb erfuhr der Kreis derjenigen, die sich nun dem Wirtschaftsleben zuwandten, eine starke Verschiebung. Nur solche Männer konnten vorwärtskommen, die über eine ausgeprägtere Fähigkeit des Organisierens verfügten, die

zu herrschen und anzuordnen verstanden, solche Leute, welche die Kunst des raschen Einschätzens, ob ein Unternehmen Gewinn oder Verlust einbringe, beherrschten, rechnerische Fähigkeiten besaßen, über ein feines Gefühl für die wirtschaftlichen Bedürfnisse der Menschen verfügten und von der Natur mit Zähigkeit, Umsicht und Tatkraft im Verfolgen ihrer wirtschaftlichen Ziele ausgestattet waren. Auf der Stufe der Stadtwirtschaft stand gute Arbeit, Redlichkeit, Ehrbarkeit und Rücksichtnahme auf die Berufsgenossen im Mittelpunkt wirtschaftlichen Lebens.....

Zu Beginn der Neuzeit fehlten indessen zum grossen Teil mit der Stadtwirtschaft die sittlichen Schranken, die das wirtschaftliche Handeln der Menschen eindämmten, denn Sitte und Gesetz vermochten der schnellen wirtschaftlichen Umbildung nicht zu folgen. Jetzt konnte sich im Wirtschaftsleben der ganze Mensch mit seinen Tugenden und Fehlern betätigen. Brutale Durchsetzung des Ich wurde nun zur Devise und fand in dem Handel mit den Kolonien ihre widerwärtigste Verkörperung. Dem wirtschaftlichen Wirken der Menschen standen von nun ab ganz andere Werkzeuge zur Verfügung. Die Ausbildung der Geld- und Kreditwirtschaft, sowie des Nachrichtenwesens ermöglichte den wirtschaftlichen Fähigkeiten, sich in ungeahnter Masse auszuleben.

斯くて茲に商業に於て其行動の方面を求めたる人々は、都市經濟の時代に要求せられたるを全く異なる才能を有せざる可からざることをなす。従て經濟社會に身を投ずる人々の範圍は大いに變動を見たり。經濟社會に入りて成功せんには、顯著に組織的才能を有し、人を支配し命令する道を解し、又た一の企業が損ある可きや利ある可きやを速やかに打算する術を制し、算勘の才に長じ、人類の經濟的欲望に關して緻密なる感覺を有し、其人となり忍耐思慮活動力に富みたるものたるを要す。都市經濟の時代は然らず、善き働正直名譽を重んずること、同業者に對する斟酌等が經濟生活の中心たりき。新時代起るに及び、此等の人類經濟生活に關する道德的束縛は、都市經濟の仆る、と共に打破せられ、道德も法律も急速なる經濟上の變遷に追隨する能はず。經濟生活に於ては、長所も短所も共に著しき全人が自由に活動するを得ることとなり。自我を極度迄主張することが一般の標榜となり、殊に植民地との貿易に於て其最も厭ふ可き發現を示せり。かくて人類の經濟的行爲には全く新しき器具が適用せらるることとなり、貨幣經濟信用經濟共に通信事業の完成は各種經濟的才能を未曾有に伸張することを得せしめたり。

而も此は人類の性質其ものに變化を惹起したるに非ず、人類行動の條件に變化を喚起し

たるに過ぎざるものなり云々。

Die Charakterveränderung des wirtschaftenden Menschen, die sich in diesen beiden Zeiträumen so krass zu erkennen gibt, ist aber mit nichten auf eine Entwicklung innerhalb der menschlichen Natur zurückzuführen, die in dem Erwachen eines wirtschaftlichen Triebes, des Erwerbstriebes, zutage treten soll. Nicht der Mensch war anders geworden, sondern das Niveau, in dem er lebe, hatte sich durch die sich anhäufenden Produkte der Tätigkeit von Generationen von Menschen verschoben.

以上二の時代に於て爾かく顯著に認めらるゝ經濟する人類の性格上の變化は、決して人類の性質其ものゝ内に起れる發展、即ち經濟的衝動・營利の衝動の覺醒と云ふが如きものに於て顯はるゝに非ず。人類は別物となりしに非ず、人類の生活する包圍が、人類數代の行動の蓄積的産物によりて變化したるなり

と斷じ結論を下して云ふ様以上の研究の結果

- 一 經濟的進歩は經濟的發展の促進者として作用す、換言すれば、一の進歩は他の進歩を喚起す。
- 二 經濟的進歩の行程は決して任意的のものに非ず、經濟生活の本質上必然的のもの

なり。(以上一六九—一七八)

さ。猶氏の歴史的敘述に對してはペローの評論あり其缺點を指摘して要を得たり。今煩を厭ひて之を紹介せず唯ミ氏の說中本文ミ對照するに足る部分の梗概を示めすに止む。

#### 第四章 貨幣經濟と企業

企業の本質を究めんとするには其が貨幣經濟との間に有する關係に先づ着眼するを要す、營利經濟ミ云ふも必竟は貨幣經濟に於て營利の衝動が顯著にして精確なる秤量を有することを指すに外ならず。元より企業の發生ミ發達ミを技術の方面に就て觀察するところは多くの有益なる暗示を得る所以たるは疑なし。然リミ雖も抑も技術の發達を經濟上の發達たらしむ可き根柢の原因を先づ究むるにあらざれば單に文明的概論ミ

しては差支なかる可きも、企業發達の經濟理論ミしては不備たるを免れず。而して企業の發達が喚起したる各般の經濟上の問題—特に勞働問題—の研究は技術發達の上に於て其真相を捉へんこと望なし、自然淘汰の經濟上に於ける作用は、唯だ貨幣經濟の本質ミ併せ考ふるによりてのみ適當の解説を得可し。進化論が經濟生活の上に如何に運用せらる可きものなるやを決定するものは、貨幣經濟の本質論あるのみ、技術の問題に非ず類推解釋の問題にもあらず、必然、特定關係の問題なり。此意味に於ては『社會問題は口腹の問題なり』てふ主張は問題の半面を道ひたるに過ぎず、精確に言顯はさんせせば寧ろ『社會問題は貨幣の問題なり』ミ云ふの勝れるに若かず。『口腹の問題』は人類經濟生活の始めより常に存せり、所謂社會問題ミ共に發生したるにあらず。唯其れが極めて痛切の問題たるに至りしは、口腹の問題が貨幣の問題の形態を取るに至りし故なり。換言すれば貨幣經濟の普及完成は問題の意義を精確ならしめ其所在を顯著ならしめ、而して其解釋を急要事たらしめたり。予は元より技術の發達の偉大なる作用を否定するものにあらず、進化發展の一般法則の均しく經濟生活を支配する所以を度外視するものにあ

らず。然れども經濟現象其ものを經濟學の問題として取扱ふには唯其のみを以て足れりとする能はず必ず問題の根源に溯つて考究せざる可からざるなり。

さてゾムバルトに於て好箇の代表者を見出したる今日の企業論は其本質を叩けば多くは經營論の擴張に過ぎざるやの觀あり。唯だシュモラーの『企業の歴史的發達論』のみは稍々廣汎の眼界に涉り企業其もの、有機的發達の上より其本質に肉薄するもの如し。之に反し殆んご同様の立場を經濟發展論に於て取るブヒアアの企業發達論は著しく經營發達論に偏りたるの觀あり。マーシアルの『産業組織論』も分業と機械の影響を説き大規模の生産 Production on a large scale を論ずる態度は獨逸學者の經營論と其趣を同ふするもの、如し。抑も經營の形態と企業の發達とが密接なる關係を有することは否定す可からざる事實なり。然れども經營の形態は企業發達の原因にあらずして多くの場合其結果たり（家内工業の例を見て知る可し）。元より技術上に於ける進歩が企業の發達を促進する場合は多々ありと雖も其促進には猶一箇の階段あり之を經過したる後にあらざれば其促進は事實となる能はざるを常とす。吾人は此階段の性質を知らざる可からず。

經營形態の變遷を移して直ちに企業の發達を説くことは多くの便利あり殊に初學者に對して一目瞭然たる説明を試むるに適切なり。彼の家内仕事賃仕事手工業より説き起して『フェルラーグシステム』に及び續いて工場制工業の發生を論ずるブヒアアの叙述は明晰と平易とに於て多く比喩を見ず、少くも手工業と工場工業との比較は企業の發達を示めすに甚だ妙なり。然り然りと雖も此種の叙述は其前提として貨幣經濟の本質に就て、少くも大體に於て認識せられたる見解あるを要するを忘る可からず。マルクスが詳細の論を先づ Metamorphose der Ware に付て試み其準備として Festscharakter der Ware を説きたる用意は吾人の捨つ可からざる所に屬す。此用意を缺き而して經營形態論を專にし其立場より直ちに經營と企業との區別を『シエマチック』に挿入せんとするは事の順序を顛倒したるものと評せざるを得ず。通説に於て經營は技術上の組織にして企業は經濟上の組織なりと謂ふ其眞意を展開すれば、即ち稍々此間の消息を鮮かにするを得んか。此通説に對し關博士は經營は生産上の組織、企業は營利上の組織

と言ひ改む可しと主張せり。『國民經濟雜誌第九卷第四號』博士の説は聊か觀察の方面を限局して考ふるときは亦た一種の見解たるを失はず。然れども問題の所在は此種の對立に存するにあらず、更らに深く經營と企業との本質に就て之を求めざる可からざるなり。關博士は上田坂西兩教授の批評ありしに拘らず右論文の説を其儘其『工業政策』(七一—九四頁)に於いて繰返されたり。されば予は今右論文に付てのみ論ず。

何故に通説に於て經營と企業とを對立せしむるや、獨逸の經濟學に於て斯く通説たるものが英國又は佛國の經濟學に殆んぞ存在せずして、經營なる術語英佛伊蘭に別にならざる差支を感じざるが如くなるは何故ぞや。關博士は企業の意義に就てはゾムバルトの説を大體に於て受け入れ單に經營の意義に就て詳しく考られたり其故は經營なる術語の意義聊か漠然に過ぐし認められたるが爲なる可し。坂西教授の文克『此點を明かにし』の論文を通覽して其所説を比較して見るに、(一)企業と經營との概念は混同されはならぬものである。(二)此の兩者は單に同じもの、異なりたる方面ではない之は企業發生以前に經營の在るによりて明かである。(三)企業は營利の組織であるとなすに於て一致し結局此等の點に關してはゾムバルトに對して敢て異論を挾むものではない。唯異論のあるのは『經營』の意義に關しては之を要言して見るに『經營は技術上經濟上并に法律上の關係等に基く生産の秩序組織なり』と云ふことなる。以上國民經濟雜誌第十卷第一號。茲に問題は二様の意味に於て提出せらる可し第一ゾムバルトの企業に下せる極めて

狭き意義を何故其儘に受納せざる可からざるか、第二經營の意義を企業の意義と嚴密に終始一貫して對立せしむることが何故に斯く必要なるか是なり。此間に對して與へらる、答は思ふに其はゾムバルトの説き且つ主張する所なればなりとの外に出でざる可し。關博士はゾムバルト説に對し精密なる批評を下したれ共一企業の意義を其儘ゾムバルトより取り二企業と經營とを對立せしむるに就て痛く工夫を凝すことゾ氏の如くなれば、必竟はゾムバルトに即して唯だ少しく修正を試みんとするものに外ならず、更らに局外に出で、抑もゾムバルトの説の依て來る根柢に就ては些の精彩を着けず。坂西教授の言を藉て反問するにせば、一何故に企業と經營との概念は混同するを許さず、嚴に區別せざる可からざるか、二何故に此兩者は單に同じきもの、異なりたる方面にあらず其は企業發生以前に經營の在りたるによりて明なりと云ふとを重要視するを要するか、三何故に企業は營利の組織なりと云ふか。其はゾムバルトが主張する所なればなりと答るのみにて足るか。予は此等の諸點を明かならしめざる可からずと信ず。抑もゾムバルトが其の『近世資本主義論』の卷頭に下したる解説は彼れ自から告白



する如く「識者は予の發展系統をマルクスの發展系統と因縁あるもの。悉く之れをマルクスより取り來れるものなり。而して英佛の經濟學になくして獨り獨逸の經濟學に存する企業經營の對立も亦所詮はマルクスに胚胎するものなり。唯だゾムバルトは極めて露骨にマルクスの用語までも之を取り來れるに反し、獨逸經濟學の通説は之を異れる言語を以て言ひ表はして甚だ罪なきものとしたるを異れりとするのみ。即ちゾムバルトは『行程』を『團體』と改稱したるのみにて Verwertungsgemeinschaft の Arbeitsgemeinschaft と云ひ、通説は之を極めて平凡なる言表はし方に改めて技術上の組織對經濟上の組織と云ふなり。關博士も上田坂西兩教授も此根本の問題に觸れず而して關博士は急ぎて其修正を試みたり。恰も此は『ノメンクラートル』の問題に過ぎざるが如くに取扱はれ問題其ものは爲めに却て支離に陥れるやの觀あり。ゾムバルトの複雑なる『シマチツク』は畢竟右兩者の區別に關する根本見地を布演したるものに過ぎたることヲ三氏共に之れを度外視せり。ゾムバルトは特に明言すらく、

Betrieb ist Arbeitsgemeinschaft; Wirtschaft ist Verwertungsgemeinschaft. Es liegt mir viel daran,

diese Unterscheidung zwischen Wirtschaft und Betrieb zu einem sichern Besitzstande unserer Wissenschaft zu machen, da ich ihr, wie sich im Folgenden zeigen wird, eine grosse Bedeutung für die

richtige Beurteilung des Wirtschaftslebens beizumessen. (SS. 5—6)

之を邦譯すれば

經營は勞働團體なり、經濟は價值増進團體（之を活用の團體と邦譯する甚だ中らす）なり。經營と經濟との間に存する此區別を我經濟學の一の確實なる所有物とすることは予の大いに重きを置く所なり。蓋し予は以下述ぶ可きが如く、此區別を以て經濟生活を正しく判断するに大なる意義ありと認むるものなればなり（同書五六頁）

此一句は關博士により提出せられたる一切の問題を解決す可き根本的見地を道破したるものなり。然るに博士も又兩教授も此一句の存在を明かに認め乍ら其意義に就ては何等考ふる所なし故に予は此論争は悉く其標的を逸したりと斷言するに憚らず。關博士は左右田博士の言を引きて「經濟」に關する從來の學說の攻撃は賛同を辭する能はざる所に就て此 Ursache der Verwickelung を一掃するは學者の務なる可きを信ずるとしてゾ氏は經濟なる語に就ては定義を示さず觀念の錯雜せるものなりと非難したり（前掲の論文四三頁）と雖も右の一句に於ける經濟とは『經濟形態』の略稱なること前後の關係に照らすも又たゾ氏自らの言

に徴するも明なり。觀念の錯雜は却て關博士にあり、ソ氏にあらざる況や左右田博士の意味する所は此關係に於て全然場違なり、關博士は肝要の點を逸し、輕微なる枝葉の事柄に重きを置きたるものなり、加之ソ氏の此一句『經營は勞働團體なり、經濟經濟形態は價值増進團體なり』と通説即ち予が國民經濟の原論に掲げたる『經營は技術上の組織企業は經濟上の組織』とは根柢に於て同一事を道ふに外ならざるに注意せざるは甚だしき脱漏なり。ソ氏の『經濟形態』學者の用ゆる廣き意味の企業を言ひ表さん爲め作爲したる術語なること又た注意せられず、坂西教授の所謂企業發生前に經營存すの企業は、ソ氏一流の狹き意味の企業のことたる勿論なり。然れども強て發生以前以後を別つ必要ありませば、『勞働團體』は『價值増進團體』の以前にあること勿論なり。之を經營は企業以前にありと云ふは、ソ氏の説を悉く正しと決定したる後ならず。茲に『技術上』のミ云ふは『勞働行程上』のミ云ふこと、『經濟上』のミ云ふは『價值増進行程上』のミ云ふことを極めて平凡なる言語に引直したるに外ならず。『勞働團體』を經營と結び付け、『價值増進團體』を企業と結付くることの當否は別問題として、抑も斯くすることは必ずしもゾムバルト獨得の工夫にあらざる、獨逸經濟學近時の傾向なり。而して其然る所以は偶々以て表面上痛く斥けられつゝあるマルクス説が如何に重大なる影響を獨逸經濟學の上に及ぼしつゝあるかを有力に語るものにあらずや。マルクスの影響を被ること少き他國の經濟理論獨逸學者を祖述するものは元より除く。ヴェブレンの如き

又た關博士の如き、に企業經營對立説の存在せざる所以を考へ見よ。更に又企業の意義を殊更らに狭く限局するゾムバルト説が獨逸に於て又其祖述者によりて歡迎せらるゝ所以を考へ見よ。其消息は多言を要せずして明ならん。而もマルクスの影響を被りつゝ自ら之を悟らず却て襲踏の遺物に就て徒らに葛藤を打出するに至つては、マルクスの長所は全く失はれ其短所のみ誇張せらるゝ云ふ可きのみ。通説の引直しは餘りに平凡に過ぎたり、雖も未だ取る可き所あり、平凡を通過して沒意義に墮落したものは斷じて捨てざる可からず。ゾムバルトが其區別を特に重要視す可しと主張し其『近世資本主義論』總論の中心問題と爲したる Arbeitsgemeinschaft の Verwertungsgemeinschaft とは、マルクスの Arbeitsprozess の Verwertungsprozess とを其儘取り來れるものなり。資本論第一卷第三編第五章の表題(一三九頁)を見よ。今マルクスの語を引かんに曰く、

Der Gebrauch der Arbeitskraft ist die Arbeit selbst. Der Käufer der Arbeitskraft konsumiert sie, indem er ihren Verkäufer arbeiten lässt. Letzterer wird hierdurch actu sich bethätigende Arbeitskraft, Arbeiter, was er früher nur potentia war. Um seine Arbeit in Waaren darzustellen, muss er

sie vor allem in Gebrauchswerten darstellen, Sachen, die zur Befriedigung von Bedürfnissen irgend einer Art dienen. Es ist also ein besonderer Gebrauchswert, ein bestimmter Artikel, den der Kapitalist vom Arbeiter anfertigen lässt. Die Production von Gebrauchswerten, oder Gütern, ändert ihre allgemeine Natur nicht dadurch, dass sie für den Kapitalisten und unter seiner Kontrolle vorgeht. Der Arbeitsprocess ist daher zunächst unabhängig von jeder bestimmten gesellschaftlichen Form zu betrachten.

Die Arbeit ist zunächst ein Process zwischen Mensch und Natur, ein Process, worin der Mensch seinen Stoffwechsel mit der Natur durch seine eigne That vermittelt, regelt und kontrollirt.

(SS. 139—140).

之を邦譯すれば

勞働力の使用は勞働其自らなり。勞働の購買者は、其販賣者をして勞働せしむるによりて之を消費するものなり。之によりて、其販賣者は、潛勢力たりし勞働力を現勢活力たらしむる勞働者となるなり。其勞働を商品に發現せしめんには、彼は先づ之を使用價值に發現せざる可からず、即ち何等の種類の欲望を充足する用に供せらる可き物となる。

る可からず。されば資本主が勞働者をして製作せしむるものは一の特殊的使用價值なり、一の定りたる品物なり。使用價值即ち財の生産は資本主の爲めにし、其監督の下に行るべきものによりて、其一般的性質を變ずることなし。要言すれば、勞働行程は一切の特定せる社會的形態より離れてきふ可きものなりとす。

勞働とは、人と自然との間の一行程の謂なり、此行程たる、人間が其材料變化を自然と共に、彼自らの行動によりて仲介し、左右し、監督することなり。(一三九—一四〇頁)

マンヌスは更に此語を改めて曰く

Der Arbeitsprocess, wie wir ihn in seinen einfachen und abstrakten Momenten dargestellt haben, ist zweckmässige Thätigkeit zur Herstellung von Gebrauchswerten, Aneignung des Natürlichen für menschliche Bedürfnisse, allgemeine Bedingung des Stoffwechsels zwischen Mensch und Natur, ewige Naturbedingung des menschlichen Lebens und daher unabhängig von jeder Form dieses Lebens, vielmehr allen seinen Gesellschaftsformen gleich gemeinsam. Wir hatten daher nicht nöthig, den Arbeiter im Verhältnis zu andren Arbeitern darzustellen. Der Mensch und seine Arbeit auf der einen, die Natur und ihre Stoffe auf der andren Seite, genügen. (S. 146)

之を譯出すれば、

以上吾人が其最も單純にして抽象的なる要素に於て解説したる勞働行程は、使用價値の産出の目的に合ふ行動なり、人間の欲望に對し自然物を占有することなり、人間と自然との間に於ける材料變化の一般的要件なり、人間生活の永久的自然條件にして、從て人間生活の如何なる形態にも關係なく、却て一切の社會形態に等しく共通なるものなり。故に吾人は勞働者が他の勞働者に對して有する關係を説明するの必要を見ざりしなり。一方に於ては人と其勞働他方に於ては自然と其材料之を考究すれば勞働行程の説明を盡し得るなり。(二四六頁)

されば勞働行程の問題としては唯だ生産品を見るのみ、其生産の行はるゝ社會的條件即ち人と人との關係、殊に勞働者と資本主との關係の如きは、毫も問ふ所にあらず、奴隸制度の下に生産せらるゝも野蠻人の間に製作せらるゝも、亦是賃銀制度の下に生産せらるゝも、其生産品にして吾人の欲望を充すに足る以上何等の詮索を要せざるなり。而して資本制度の下に於て、資本主が勞働力を消費する行程として見たる勞働行程には、二個の特有なる現象あり。第一、勞働者は資本主の監督の下に勞働し、其勞働は全然資本主の有に

歸す。第二、其生産物も亦た資本主の所有に屬し、直接の生産者たる勞働者の有に歸せず。勞働者が資本主の工場に一度足を踏入るゝと、既に彼が勞働力の使用價値即ち其使用たる勞働は資本主の物たり。されば資本主より見れば、勞働行程とは畢竟其買入れたる商品たる勞働力の消費の謂に外ならず、唯だ其消費は之に生産要具を補足せざる可からざるを特有の點とするのみ。換言すれば、勞働行程とは均しく資本主が買入れたる物と物均しく彼の所有に屬する物と物との間に於ける一行程に過ぎず、從て其行程の産物が全然彼の有に歸するは當然怪むに足らざるなり。然らば『價值増進行程』とは如何。彼曰く、

Das Produkt—das Eigenthum des Kapitalisten—ist ein Gebrauchswert, Garn, Stiefel u.s.w. Aber obgleich Stiefel z. B. gewissermassen die Basis des gesellschaftlichen Fortschritts bilden und unser Kapitalist ein entschiedener Fortschrittsmann ist, fabricirt er die Stiefel nicht ihrer selbst wegen. Der Gebrauchswert ist überhaupt nicht das Ding, qu'on aime pour lui-même in der Waarenproduktion. Gebrauchswerte werden hier überhaupt nur productirt, weil und sofern sie materielles Substrat, Träger des Tauschwerths sind. (S. 148—9)

生産品——資本主の所有物たる——は一の使用價值なり例へば綿糸長靴等と云ふが如し。但し縱令長靴は或度までは社會的進歩の根柢を成すものにして資本主が斷乎たる進歩的人物なりとも彼は長靴を長靴の爲めに製造するものにあらず。使用價值は商品生産に於ては『其自らの爲めに好まるゝ』物にあらず。此場合使用價值を生産するは、其が物質的基礎たり交換價值の負擔者たるが爲め又然る限りに於てのみ。(一四八—九頁)

と。而して此の場合資本主の立場より見れば二個の目的の達す可きあるなり。第一彼は交換價值を有する使用價值即ち販賣の目的の爲めの物品たる商品を生産せん。第二彼は又其生産に要したる價值總額即ち生産要具及勞働力に對して商品市場に於て支出したる貨幣額以上の價值を有する商品を生産せん。換言すれば彼は單に一の使用價值を生産するを以て足れりせず、一の商品を作らんし使用價值のみならず價值を生産せんし、價值のみならず同時に又た餘剩價值を産出せんとするなり。故に曰く商品の生産は勞働行程たるのみならず又た兼ねて『價值回收行程』(Werthbildungsprozess)

なり。彼は綿糸の例を擧げて此理を説きたる後、更らに要言すらく、

Wir haben diese Arbeit jetzt von einem ganz andren Gesichtspunkte zu betrachten, als während des Arbeitsprocesses. Dort handelte es sich um die zweckmässige Thätigkeit, Baumwolle in Garn zu verwandeln. Je zweckmässiger die Arbeit, desto besser das Garn, alle andren Umstände als gleichbleibend vorausgesetzt ... ..  
 Sofern die Arbeit des Spinners dagegen werthbildend ist, d. h. Werthquelle, ist sie durchaus nicht verschieden von der Arbeit des Kanonenbohrers. ... ..  
 此場合吾人は勞働を見るに勞働行程に於けるを全く異りたる觀察點よりするを要す。勞働行程に於ては、木綿を變じて綿糸と爲すてふ合目的行動が主眼なり。他の事業に變化なしと前提して、勞働が合目的なる程善き綿糸が生産せらるゝと云ふのみ。.....之に反し、紡織工の勞働を價值回收行程即ち價值の淵源として見るときは、其勞働たる大砲製造工の勞働と毫も異なる所なきなり(二五一頁)

而して曰く(一五七頁以下)、資本主は、凡の商品の買手と同じく勞働力を買ひて其使用價值を消費す勞働力の消費行程は即ち商品の生産行程なり。彼は其生産せられたる商品

を再び市場に持出して賣る。彼は買ふも市場に於てし賣るも市場に於てす。かくて流通の行程に於て貨幣は資本に變ずるなり。貨幣が資本に變ずるも變ぜざるも其全經過は悉く流通場裡 Cirkulationsphäre に在り。貨幣を商品に變化するによりて死物は活物となる。『價值回收行程』と『價值増進行程』との異なる所は、單に行程の長短にあり前者が一定點を経過するときは後者となる、後者は唯だ前者の延長せられたるもののみ。其一定點とは資本によりて支拂はれたる勞働力の價值が新なる對價によりて代償せらるゝ點是なり。而して此意味にての『價值回收行程』と『勞働行程』とを比較して云ふ、

Vergleichen wir ferner den Werthbildungsprozess mit dem Arbeitsprozess, so besteht der letztere in nützlicher Arbeit, die Gebrauchswerte producirt. Die Bewegung wird hier qualitativ betrachtet, in ihrer besondern Art und Weise, nach Zweck und Inhalt. Derselbe Arbeitsprozess stellt sich im Werthbildungsprozess nur von seiner quantitativen Seite dar. (S. 158)

更らに價值回收行程を勞働行程と比較するときは、後者は使用價值を生産する有用勞働に存す。即ち其運動は特定の種類と方法、目的と内容とに就て品質的に觀察せらるゝものなり。然るに同一の勞働行程は價值回收行程に於ては、唯單に其分量的方面に於て現

るのみ。(一五八頁)

る。而して結論を下して曰く、予が商品の解剖に於て示したる使用價值のみを生産する勞働と、價值をも生産する勞働との區別は、以上の解説によりて更らに生産行程の異なる方面の區別たる所以を知る可し。『勞働行程』と『價值回收行程』との結合單位として見るときは、生産行程は畢竟商品の生産行程なり。『勞働行程』と『價值増進行程』との結合單位として見るときは、生産行程は資本的生産行程換言すれば商品生産の資本的形態たり。『價值増進行程』の立場より見るときは、勞働が單純社會的平均勞働たるに複合勞働たるとは何等の差違なし。何れの場合に於ても、餘剩價值は勞働の分量的剩餘のみ來る。以上大意を取る。詳しくは資本論第一卷一六〇頁以下を見よ。

以上の引照に於て、予はマルクス特有の價值説と關係ある箇所は之を省き、唯だ『勞働行程』と『價值増進行程』とに關する説明の如何なるものなるかを示めず、に止めたり。而して此説たる、以下之に續く不變可變資本論に導くものにして、其當否の吟味は姑く措き、マルクス説を諒解するには之を知ること必ず缺く可からざるものとす。ゾムバルト

は之を前後の關係より切斷して、自家新案の根柢をなし、更らに之を經營に企業との差別の標準をなしたるなり。若しゾムバルト説の缺陷を指摘せんならば、先づ此點に就て精考を加へざる可からず、然らずして彼自ら重きを置かざる『シエマチツク』に就て、區末葉に渉る評論を企つるは畢竟無用事なり。

さて以上のマルクス説は彼自ら云ふ如く、要するに Analyse der Waare (商品の解剖) より得たる『貨幣資本に變化す』『貨幣商品に變化す』『資本貨幣に變化す』『商品貨幣に變化す』の Verwandlungsprozess (變化の行程) 又は Metamorphose (變形) 論の一適用たるなり。換言すれば、彼の重きを置く所 Metamorphose der Waare: Kreislauf, W—G—W, Verkauf, W—G, Kauf, G—W (商品の變形。循環行程 || 商品—貨幣—商品。即ち販賣 || 商品 || 貨幣。購買 || 貨幣—商品) の行程に在り。更らに換言すれば、『價值増進行程』は貨幣經濟に於て始めて之あり、『勞働行程』は貨幣經濟の存在を否に關せずして在り。されば貨幣經濟に於ては『勞働行程』と『價值増進行程』と並び存するは勿論なれども、其特色を認め可きものは獨り後者に在り、『價值増進行程』ありて始めて企業あり、企業ありて『價

値増進行程』は經濟生活を支配するものとなる。『價值増進行程』は『勞働行程』其ものより生れ出でたるものにあらず。故に曰く、企業の本質を究むるには、其が貨幣經濟との關係に先づ着眼するを要す、經營形態論を直ちに移して類推解釋を爲す可きものにあらず、更に又た技術發達の叙述を以て企業發達論と同視す可きものにあらず。

#### 第四章 補論

勞働行程に於る餘剩價值と、價值増進行程に於る餘剩價值とに就て少しく管見を下さんに、兩者相伴ふことあり、然らざることあり、必然的關係の存在は之を認む可からず、唯多くの場合に於て勞働行程の餘剩價值は、價值増進行程の餘剩價值を形成する目的の爲め的手段たることあるのみ。換言すれば、勞働行程の餘剩價值は直ちに價值増進行程の餘剩價值となるものにあらず。故にマルクスは其區別を明らかならしむるに多くの言を

費したり。但しマルクスの勞働行程の企業の依つて立つ所以は、元より價值増進行程の上  
にありて、餘剩價值なる語を用ゐず。餘剩價值なる語を用ゐず。餘剩價值の取得を目的とす、然れども之を勞働行程とし  
て見るときは、又た勞働行程に於ける餘剩價值を形成するものにして、此兩個の方面を究  
むること企業の本質論に缺く可からず。ゾムバルトがマルクスの説を擴張して、企業は  
價值増進團體なり、經營は勞働團體なりと主張し、此區別を重大視するは抑も故あること  
にして、更らに之を詳しく云ひて、企業は價值増進行程に於ける餘剩價值の取得を目的と  
する團體なり、經營は勞働行程に於ける餘剩價值の取得を目的とする團體なりとせば、其  
意明瞭なる可し。之を極めて簡単に言ひ換へたるは通説の經濟上の組織技術上の組織  
云々是なり。關博士の新説生産上の組織營利上の組織云々も、生産とは勞働行程の謂營  
利とは價值増進行程の謂なりと解釋すれば、又自ら一説たるを得可し。然れども關博士  
の考ふる所は、餘剩價值の形成は唯だ營利のみにありて、生産には之なしとするものゝ如  
し。果して然りとすれば、博士の説は終に誤謬たるを免れず。博士自ら云ふ「經營に於  
ては、生産の目的の爲に、人的及物的要素の結合を要するを以て、物的要素は必ず一度物的

資本の形態たるを要するも、企業に於ては營利の目的を有するに過ぎず、従つて企業上の  
資本は、生産に必要な物的資本の形態を探るを要せず、豫定の収益力を換算して貨幣を  
以て言ひ表はしたる資本たるを以て足れりとす、而して此豫定の収益が實現せざる時は、  
企業者の利潤は全然消滅し大損失を免かれざる者なり、此特質は現時の所謂資本制企業  
の本質を明にするに當りて、缺く可からざる所なり」國民經濟雜誌第九卷第四號五十一頁 又曰く「されば企  
業の根本觀念は収益力 *Rentabilität* に在りて、収益能力に關する危険を踏むは企業者の手  
工業者又は(?)勞働者と區別せらるゝ所以なり」同上四十一頁と。博士の茲にリーフマン  
を引用して唱道する収益能力なるものは、何物を指して云ふか詳かには知り難しと雖も、  
前後の關係より推斷するに、價值増進行程に於ける餘剩價值即ち利潤を生ずること、又は  
生ずる力の意なるが如し。果して然りとすれば、此理を明らかにしたることは、博士全體  
の結構には相應せざるも、甚だ感謝して受取る可き所とす。然るに餘剩價值を以て唯だ  
價值増進行程に於てのみあるものにして、勞働行程には存せざるものゝ如く云ふは、説て  
未だ精しからず。畢竟營利なる文字に束縛せられ之を以て餘剩價值取得の一切なりと



し企業は餘剩價值收得の一切の組織なりとの意に於て之を營利經濟とし經營は餘剩價值の收得に全く關係なしとの意に於て之を生産の組織とする速斷に陥れるものなり。問題は餘剩價值の存否にあらず其餘剩價值の質的差別にあり。生産を勞働行程の意に解するにせよ然らざるにせよ經濟上に於て云ふ生産は畢竟價值形成の謂に外ならざること、前編生産の條下に述べたる所の如し。然るに價值の形成と云ふ以上結局に於ては餘剩價值の形成を意味するものなること博士未だ想ひ及ばず、之を博士説の根本的缺陷と爲す。上田坂西兩教授の評論甚だ微細に入りて當を得たりと雖も、未だ攻めて博士這箇の痛所に及ばず甚だ遺憾とす可き所なり。

企業經營の對立を説く獨逸流の經濟理論の學問上に有益なるは、要するに勞働行程に於ける餘剩價值の形成と價值増進行程に於ける餘剩價值の形成とを辨別するが故なり。されば餘剩價值の收得と云ふことは許されたる前提なり若し一方に之を認め他方に之を拒む可きものなりとせば兩者の對立は始めより問題とならず。均しく餘剩價值の收得行程にてあり乍ら、一は勞働行程に在り他は價值増進行程に在りと云ふ一點に凡ての

意義は含蓄せらる。此の兩者は全く別箇の世界を有し従つて前者を目的とする組織と後者を目的とする組織とは今日の經濟生活に於て混同するを許さざるものなるを認むること流通生活の研究に於て甚だ肝要なり。關博士の引用したるリーフマンの言『予の見る所にては、『レントスピリット』「レントスピリット」を餘剩價值の形成と同視す可からずの思想は企業最終の特徴なり』云々は此意味を云ふものにして、ゾムバルトの説も亦同一轍に出づ。而してアダムスミス以來、此認識は利潤論の名の下に徐々に進歩を爲しつゝありて、マルクスは決して前人未到の見地を獨占するものにあらず、唯だ此思想を根柢まで透徹せしめたるのみ。

抑も企業なる語は、危險を冒して一事を敢てするの意を有す。獨逸語 *Unternehmung* は *unter die Gewalt nehmen, überwältigen* (威力の下に取る、威服する) の意より起れり。之に反し經營の原語 *Betrieb* は *verstärktes Treiben, abweiden, fortgesetzt ausüben* (力を込めて營む、繼續して執行す) の意に於て *Ausübung einer fortgesetzten Tätigkeit* (繼續的行爲の執行) が其根本義なり。言語の上に於て兩者は必然の關係を有せず否必然關係の有無は始より問題たら

ず。然るに、獨逸の經濟學に於て兩者相關連して用らるゝ所以は畢竟此兩語は價值増進行程に於ける餘剩價值と勞働行程に於ける餘剩價值とに關連するものとして解釋せらるゝが故に外ならず。

勞働行程に於ける餘剩價值は流通生活に於ける發展の經過に關係なく、唯だ夫れ自らに於て専ら人と物との關係に就て形成せらる。マルクスの所謂使用價值とは即ち此の謂にして、人と物との品質的并に分量的變化によりて費されたる價值を償ふて餘ある價值を生ずることなり。企業の手段たるるとき、然らずして其自ら一個獨立の業たるるときとを問はず、人と物との關係が品質的に分量的により能く、より多く、人の満足を購ふに至ること、是れ勞働行程の本領にして、之を技術的と名くるはヘルマンに始まる。ヘルマンは技術と經濟との區別を論じてマルクス以前既に此消息を傳へたり。此勞働行程は今日の經濟生活に於ては經營てふ組織を有し、企業は之を手段として利用す。勞働が價值の唯一の淵源なりと云ふは、此勞働行程にのみ就て云へば決して謬見にあらず、アダム・スミスは『財産の蓄積土地の私有なき原始草昧の社會』に於て勞働は價值の唯一の淵源

なりと云ひて此理の一面を道破したり。然れども此く歴史的に時代分けすることは當を得ず、リカルドが土地の私有財産の蓄積起れる後の社會に於ても此理蘊ることなしと主張せるは、之を勞働行程のみに限局して見るときは、克くスミスの謬を匡したるものなり。唯だリカルドは此半面のみを見て、他の價值増進行程の方面を全く度外に措きたるが故に其謬はスミスよりも更らに大なり。スミスの利潤論がリカルドの利潤論よりも遙かに勝れる所以蓋し茲に在り。

勞働行程は自然征服の行程なり故に之を支配する法則は自然法則なり、價值増進行程は人事調節の行程なり従つて之を支配する法則は文化法則なり。法則の根本的變化は死を意味す、生の法則を悉く脱するものは死の法則の下に立つこととなる。勞働行程として見たる餘剩價值其ものが、文化法則の下に立つことはあり得可からず、何となれば此は餘剩價值存在の否定と同義なればなり。其反對に價值増進行程として見たる餘剩價值は、徹頭徹尾文化法則の下に立つものにして、之を自然法則の下に思考することは亦其否定を意味するの外なし。マルクスは商品の魔性を説く條下に云ふ

Eine Waare scheint auf den ersten Blick ein selbstverständliches, triviales Ding. Ihre Analyse ergibt, dass sie ein sehr vertracktes Ding ist, voll metaphysischer Spitzfindigkeit und theologischer Mucken. Soweit sie Gebrauchswerth ist nichts Mysteriöses an ihr, ob ich sie nun unter dem Gesichtspunkt betrachte, dass sie durch ihre Eigenschaften menschliche Bedürfnisse befriedigt oder diese Eigenschaften erst als Produkt menschlicher Arbeit erhält. Es ist sinnenkla, dass der Mensch durch seine Thätigkeit die Formen der Naturstoffe in einer ihm nützlichen Weise verändert. Die Form des Holzes z. B. wird verändert, wenn man aus ihm einen Tisch macht. Nichtsdestoweniger bleibt der Tisch Holz, ein ordinäres sinnliches Ding. Aber sobald er als Waare auftritt, verwandelt er sich in ein sinnlich übersinnliches Ding. (S. 37)

右邦譯

商品を或へば一見したる所單に自明にして甚細の物なり。然るに仔細に之を解剖するに及び甚だ複雑にして形而上の困難と神學的秘密とに充てるものなるを見出す可し。商品は之を其性質によりて人の欲望を充たすものと見るも、人間勞動の結果として始めて欲望充足の性を具ふるものと見るも唯だ一の使用價值として考ふるときは、何等神祕性を帶ぶることなし。人は其行爲により自然材料の形態を變じて自己に有用なる可き權に爲すものなることは言ふまでもなし。木を伐りて卓を作るときは木材は其形態を變ず、然れども其卓は依然として尋常普通の有形物たる木材なり。然るに之が商品として現はれ來るときは、有形物は變じて、有形にして超有形なる一物となる。(三十七頁)

## 第五章 餘剩價值と利潤

餘剩價值の思想はマルクスに創まるにあらず、其根源に溯るときは價值の思想の起る所、即ち餘剩價值の思想も亦た之に伴ふことを得可し。然れども今は學說の沿革を叙述するにあらずれば、姑く之れを措き、抑もマルクスに至りて一階段に到着したる餘剩價值の思想は那邊に胚胎するやを尋ぬるに、マルクス自ら其の遺稿『餘剩價值學說史論』

Theorien über den Mehrwert. Aus dem nachgelassenen Manuscript "Zur Kritik der Politischen Ökonomie"

herausgegeben von Karl Kautsky. 1905—1910. 3 Teile. 4 Bände. に於て詳述する如く、近世經濟學の初期に在り。マルクスは右書に於てウヰリアム・ペター、チャールレス・ダヴナン、サー・ダドレー・ノース、ジョン・ロツク、デヴキツド、ヒューム、マツシー、サー・ジエームス・スチユアート、チユルゴ、バオレット、ピエトロ、ヴェリ、ガルニエ、シユマルツ、ドブア、ネツカー、リングゲ、ケネシ、アダムスミス、デヴキツド、リカルド、トーマス・ロバート・マルサス等に就て詳細に其餘剩價值論を評論す。即ちマルクスは自家の餘剩價值論を審かに此等先輩學者の所説に溯源するものにして、之を以て獨得の創意に出づる爲すものに非らざるを知る可し。但し以上列擧の諸學者必ずしも皆マルクスの云ふが如き説を唱へたるに非ず、マルクスは往強て附會の叙述を爲すとあり。然れども之を仔細に評論するは本章の題目とする所にあらず、唯觀察次第にて此等學者の所言中多少餘剩價值の思想を暗示するものあるを發見するは否定す可からず。遮莫餘剩價值の思想を取て流通生活の本質を究めんとするに方めては、價值増進行程に於ける餘剩價值の方面に全力を注ぎて、系統的に考究するを第一義とし、從て此意味に於て利潤の理論が經濟學の發達史上如何なる徑路を經來りし

やを知るこそ最も肝要なりとす。

價值増進行程の餘剩價值の意味に於て利潤を見る今日の經濟論は、其發端をアダムスミスに求むるを得可し。唯だアダムスミスが勞働を價值の淵源なりとする説を認むる態度一定せざる爲に、其眞意を補捉すると稍々困難なり。然れども思を潜めて彼の言ふ所を究むるときは、此困難は偶々以て彼が價值増進行程に於ける餘剩價值に到著せんとして、一步を残すが爲めに起るものなるを悟得すべきなり。リカルドに至りては終始一貫して、勞働は價值の唯一淵源なりとの説を維持するものなれば、其長所も缺點も共に容易に之を看取することを得るなり。マルクスは此點を指摘して『餘剩價值と利潤との混同』なる一節を其アダムスミス評論中に置けり。『餘剩價值學說史論』第一卷百五十三頁以下 其大意に曰く、アダムスミスは餘剩價值の思想を説明し、地代と利潤とを唯餘剩價值の特殊形態たり構成部分たるに過ぎざる所以を主張せり。彼の説に従へば、原料と勞働要具とより成る部分の資本は直接には餘剩價值の形成に何等の關係なきものにして、餘剩價值は一に全く勞働者が勞銀の支拂を受くる部分以外に費やす勞働の分量より成るものなり。換

言すれば餘剩價值を生ずるものは勞銀として支拂はるゝ資本あるのみ。此部分の資本のみが自己回収以外に生産品及び價値の餘剩を生産す。之に反し利潤の形態に於ける餘剩價值は支出したる資本の總額に對して計算せらるゝものにして、可變資本のみならず不變資本をも合算せらるゝに反し、すは利潤は計算せらるゝ（餘剩價值其ものは可變資本額のみを對して計算せらるゝに反し）はマルクスの宿論なり。詳しくは『マルクス資本論第三卷の研究』なる予が舊稿（經濟學研）を参考せよ。又資本の各種生産方面に於て生ずる利潤の率は均等に歸著する事實所謂マルクスの『平均利あるにより其理右に同一ならず。アダムスミスは餘剩價值を實質上は認め乍ら個々の形態に於ける餘剩價值以外一定の範疇としての形態に於ける餘剩價值あるを説かず從て範疇なる形態に於ける餘剩價值其具體的の一形態に過ぎざる利潤を同一物視する誤謬に陥れり。此缺點はリカルドに於ても又た其祖述者に於ても均しく之を認めざるを得ず。殊にリカルドは價値の根本原則を系統的統一の一貫を以て主張するものなれば矛盾は殊に顯著なり。リカルドの祖述者は徒らに博詞宏辯を費やして此矛盾を釋かんと勉めたれども元より成功する筈なし。マルクスの茲に混同を稱するものは誠に存せり然れども之を矛盾を稱するは中

らず不一貫を云ふ可きのみ。何故アダムスミスは這箇の不一貫に陥れりやと云ふに餘剩價值を以て先づ勞働行程に發生すとい説きつゝ、直ちに論法を一變して之を價値増進行程に於ける餘剩價值に其儘適用し從て勞働行程の餘剩價值と利潤との根本的に異なる所以を毫も明らかならしめざりしによる。之に比してはマルクスの餘剩價值説は終始一貫したるものと認む可きは勿論なり。然れどもマルクスの一貫は誤謬の一貫なりアダムスミスの不一貫は誤謬を正解を介する不一貫なり。リカルドに於てはマルクスの云ふ如く此不一貫が甚だ顯著なるは其勞働價值説の旗幟甚だ鮮明なるが爲なり。マルクスは勞働を以て價値の唯一の淵源なりとする其宿論に基き、餘剩價值の淵源も亦た勞働あるのみとするものにして其所謂特殊の形態なる地代も利潤も皆勞働産物を掠奪する形式に外ならず主張するものなり。アントンメンガーの所謂『無勞所得』Arbeitslosen Einkommen は勞働の所産を勞働せざるものが社會的制度の強力により略取するものとすなり。此説の誤謬なることは今改めて辯明の要なし。即ちマルクスの一貫は誤謬の一貫なりと云ふ所以なり。之に反しアダムスミスもリカルドも勞働は價値の淵

源なりと説くも雖も分配の形式を目するに掠奪を以てするものにあらざるが故に、マルクスの希望するが如き一貫の説を立つること能はず、謬れる前提を正しき解説を混淆して不一貫に陥れり。勞働を價值の淵源なりとするは謬れる前提なり、利潤を價值増進行程に於ける餘剩價值其のものと認むるは企業の實際事情に就て下せる正しき解説なり。

マルクスは其のアドムスミス評論中にホッヂスキンを引きて曰く、アドムスミスが商品は其中に包含せらるゝより以上の勞働を買ふもの、換言すれば勞働者は商品に對して其中に含有するものよりより多くの價值を支拂ものなりと云へる其意味を、ホッヂスキンは次の如く解説せり。ホッヂスキンの原書入手する能はざるにより今マルクス獨譯を其儘に取る。

Der natürliche Preis (oder notwendige Preis) bedeutet die gesamte Quantität Arbeit, welche die Natur vom Menschen verlangt, damit er eine gegebene Ware erzeuge, .....Arbeit war, ist und bleibt das einzige Kaufgeld bei unseren Geschäften mit der Natur.....Welche Arbeitsmenge immer erheischt sein mag, eine gegebene Ware zu erzeugen, der Arbeiter muss stets,

im heutigen Zustand der Gesellschaft, viel mehr Arbeit hingeben, um sie zu erwerben und zu besitzen, als erforderlich ist, sie von der Natur zu kaufen. Der so vergrößerte natürliche Preis ist der soziale-Preis. Thomas Hodgskin, Popular Political Economy etc. London. 1827. pp. 219—220.

自然價格 (又は必然價格) とは人が一定の商品を生産し得んが爲めに、自然が人より要求する勞働の全量を云ふ。……勞働は吾人と自然との取引に於ける唯一の購入金にてありき今も然り將來も然る可し。一定の商品を生産するに如何程の勞働量を要するにせよ、勞働者は常に——今日の社會狀態に於ては——之を買ひ之を所有せん爲めには自然より之を購ふ場合に要するより遙かに多くの勞働を支拂はざる可からず。自然價格の此く増大せられたるものを名けて社會價格と云ふ

斯くホッヂスキンは自然に對して支拂ふ自然價格なるもの、社會中に於て人に支拂ふ社會價格なるものを區別す可しと主張するものにして、アドムスミスの正しき所も誤れる所も共に之を其儘に傳ふるものなりと。前掲書百五十二頁五十三頁然りマルクスより見れば、ホッヂスキンの此説は正解と謬見とを混淆するものなる可し。然れども其はアドムスミ

スもホツヂスキンも勞働行程に於ける價格と價值増進行程に於ける價格との同一視す可からざるを悟りたる所以にして、マルクスの説よりも遙かに勝りて實際生活の真相を得るに近きものなるを知らざる可からず。即ちホツヂスキンの茲に自然價格と名くるものは勞働行程に於ける價值の謂にして、社會價格と名くるものは價值増進行程に於る價值の義なり。自然との取引に於て吾人は勞働を與へて財を得其與へたるものは自然價格なり、即ち勞働行程に於て費用價值たるものは是なり。此費用を支出して得たる財の吾人に與ふるものは利用價值なり。利用價值より費用價值を控除して残るものは、即ち勞働行程に於ける餘剩價值なり。之に反し、社會の中に於ける人々との取引、即ち價值増進行程に於ては、支拂ふ所の費用價值は自然に支拂ふものよりも多きを常とす。生産に要する勞働量のみが費用價值として支拂はるゝにあらず、別に人々との間に於ける賣買取引の上に就て費用價值の高は定めらる。其財の社會生活中に於て吾人に與ふる利用價值より此費用價值を控除したる殘高は、即ち價值増進行程に於ける餘剩價值なり。マルクスはスキスを考究すること甚だ精密にして、今一步を進めたりしならんには、這箇

の正解に到着す可かりしに、其勞働價值の宿説に囚はれて終に半途にして止みたり。彼はスキスを評論して實に左の如く云ひ居るなり。

.....er hervorhebt (und dies ihm förmlich irre macht), dass mit der Akkumulation des Kapitals und dem Grundeigentum—also mit der Vervollständigung der Arbeitsbedingungen gegenüber der Arbeit selbst—eine neue Wendung, scheinbar (und faktisch als Resultat) ein Umschlag des Gesetzes des Wertes in sein Gegenteil stattfindet. Es ist ebenso seine theoretische Stärke, dass er diesen Widerspruch fühlt und betont, wie es seine theoretische Schwäche ist, dass dieser Widerspruch ihn an dem allgemeinen Gesetz, selbst für den blossen Warenaustausch, irre macht, dass er nicht einseht, wie dieser Widerspruch dadurch eintritt, dass die Arbeitskraft selbst zur Ware wird und dass bei dieser spezifischen Ware ihr Gebrauchswert, der also mit ihrem Tauschwert nichts zu thun hat, eben die den Tauschwert schaffende Energie ist. Ricardo hat das vor A. Smith voraus, dass diese scheinbaren, und resultatlich wirklichen, Widersprüche ihn nicht beirren. Er steht darin hinter A. Smith zurück, dass er nicht einmal ahnt, dass hier ein Problem liegt und dass die spezifische Entwicklung, die das Gesetz der Werte mit der Kapitalbildung annimmt, ihn keinen Augenblick str-

zig macht, noch ihn beschäftigt. Wie das was bei A. Smith genial ist, bei Malthus reaktionär gegen den Ricardoschen Standpunkt wird, werden wir später sehen.

Es ist aber natürlich zugleich diese Einsicht A. Smith's, die ihn schwankend macht, unsicher macht, ihm den festen Boden unter den Füßen wegzieht und ihm, im Gegensatz zu Ricardo, nicht zur einheitlichen, theoretischen Gesamtschauung der abstrakten allgemeinen Grundlagen des kapitalistischen Systems kommen lässt. (SS. 151—152).

アダム・スミスは資本の蓄積と土地の私有と起るに従ひ——即ち労働條件が労働に對して獨立するに及び労働條件がマルクスの労働條件とは労働の營まるゝ社會の社會的條件を云ひ、労働より獨立すは資本的生産の起ることを意味するなり取せらるゝこの始まるを云ふ。——一の新しき變化起り、表面上（而して結果より見れば事實上にも）價值の原因が全く反對に移り行くことを論ず——是れ彼が形式上議論の内容は宛に誤謬に陥る所以なり——彼が此矛盾の存するを感知し之を明言する角にこの意なり。彼が此矛盾を發見したるが爲に、一般の原則 労働のみが價值の理論の強所なるを同時に此矛盾を發見したるが爲に、一般の原則 労働のみが價值の淵源なりとの當否を單純なる商品交換に付てさへも狐疑するに至り、而して此矛盾なる者は、労働

力共ものが商品となり、其使用價值——交換價值と何等の關係なき——こそ交換價值を生ずる動力共ものなるより起ることを悟るに及びざりしは、彼の理論の弱點なり。リカルドが此表面上、而して結果に就て見れば事實上の矛盾の爲めに迷はれざりし點はスミスに勝れり。之に反し、リカルドは這裡に一箇の問題が存在することを一言だもせず、資本の形成に伴ひ價值の原則が經過する特殊的發展に關して寸毫も思慮を旋らすことなく、又た之が研究を企てざりし點はアダム・スミスに劣れり。スミスが此の一事に注意を加へたるは天才的と云ふ可きものなるが、マルサスに至りては、之が爲めにリカルドに對して反動的態度を執るに至れるものなることは後に説く可し。

遮莫、スミスは這箇の消息を看破したるが爲めに其所説は動搖し、不確實となり、其立脚地は失はれ、リカルドの如く統一的、理論的に資本制度の抽象的、一般的基礎に關する綜合的見解に到達するを得ざりしなり。（一五一—一五二頁）

マルクスの茲に價值原則の一變又は矛盾と云ふものは一變に非ず、又た矛盾にあらず、スミスが此の『矛盾を看破したり』云々云ふはマルクス一流の曲解にして、スミスは之



を矛盾と認めたるものに非ず、當然別箇の原則を爲したるものなることは彼の書を公平に讀むもの必ず看取す可き所なり。即ちスミスは價值の原則に二様あるを主張するものにして、資本及土地の私有なき社會に就ては、勞働價值を認むるも、其は原始草昧の社會に限ることにして、彼れが研究の題目としたる現社會即ち資本と土地との私有が定制たる状態に於ては、右の原則は行はれずして他の原則行はるる主張するものなり。スミスは利潤と餘剩價值とを混同したりとマルクスの言へるは中らず。混同に非ず、此の現社會に於ては餘剩價值即利潤（地代も亦然り）なりとするものにして、其餘剩價值とは價值増進行程に於ける餘剩價值の意なり。彼が特に *sale* 『販賣』なる文字を使用するは單に文字の形容に非ず、特に價值増進取引の事を明からにせんが爲なるを知らざる可からず。唯だスミスは資本の蓄積土地の私有未だ起らざる社會に於ては、勞働が價值の淵源なりと云ふことを以て、勞働所産の價值の定まる唯一の原則と認めたる儘にて、其轉じて賣買の取引に於ける價值の定まる所以となる徑路を説くこと審かならざるが爲めに、不一貫の謗を辭するを得ざるなり。畢竟アダムスミスは費用價值のみに囚はれて、利用

價值を見る十分ならず、費されたる勞働支拂はれたる價格の一方のみを見て、價值とは要するに物に對する心の判斷の謂に外ならずして、其所在は物其ものにあらず、吾人の主觀的世界にあることを看破するに及ばざりしものなり。唯だ彼が天才的燭眼は、這箇の謬れる前提の爲めに累はされず、取引生活の實際に就て其真相を悟得したることは過を見ても仁を知るに云て可なり。ホッヂキンスの書は普通マルクスの學說の依て出づる所を稱之を買取して燒棄したるが爲なりとの中傷説すら行はれたるものなり。然るに今『餘剩價值學說史論』出で、ホッヂキンスの説に接するに流言の甚しく誤れるを知る。マルクスの徒らに惡評せられ、曲解せられ、濫用せらるるは、實に此くの如し。

今スミス自らの言に就て其說の一端を窺はん、に、『國富論』第一卷第六章『商品價格の構成部分に就て』 *Of the component parts of the price of commodities.* キアナム版第一卷四十四頁より五十六頁まで 原刻第一版五十六頁より六十六頁まで、同第二版頁數第一版に同じ。一章其要領を載せたり。利潤其ものに就ては同卷第九章之を論ず、勞銀・利潤異同論は有名なる長章たる同卷第十章にあり。マルクスのアダムのスミス評論は前掲書百二十六頁より百七十九頁までを見よ。

スミスは先づ資本蓄積と土地の私有との未だ起らざる原始草昧の社會に就て論を起す。曰く

In that early and rude state of society which precedes both the accumulation of stock and the appropriation of land, the proportion between the quantities of labour necessary for acquiring different objects seems to be the only circumstance which can afford any rule for exchanging them for one another. If among a nation of hunters, for example it usually costs twice the labour to kill a beaver which it does to kill a deer, one beaver should naturally exchange for or be worth two deer. It is natural that what is usually the produce of two days or two hours labour, should be worth double of what is usually the produce of one day's or one hour's labour. (2. E. p. 56.)

資本の蓄積と土地の私有と兩者未だ起らざる原始草昧の社會狀態に於ては、異なる物を取得するに必要なる労働の分量と分量との間の比例のみが、兩者を相互に交換するに方り標準となる唯一の事情なりしが如し。例へば狩獵民の間に於て、河狸一頭を屠るには、鹿一頭を屠る労働の二倍を費やすを例とするものとせば、河狸一頭は當然鹿二頭に代へて交換せらるゝか又は其價值ある可きなり。普通二日又は二時間の労働の所産が、普通一日又は一時間の労働の所産たるものと、二倍を價す可きは當然なり。

但し superior hardship (困難なるもの) 又は uncommon dexterity and ingenuity (非常なる熟練及

び技巧) を要するものに對しては相當の斟酌を加ふ可きは勿論なり。さて

In this state of things, the whole produce of labour belongs to the labourer; and the quantity of labour commonly employed in acquiring or producing any commodity, is the only circumstance which can regulate the quantity of labour which it ought commonly to purchase, command, or exchange for. (2. E. p. 57)

此くの如き狀態の下にありては、労働の全所産は労働者に屬す。而して一商品を取得し又は生産するに普通用らるゝ労働の分量こそ、其商品を以て購ひ・支配し又は交換す可き労働の分量を定め能ふ唯一の事情なり。

右一句中始めの『労働の全所産は労働者に屬す』の數語は第一版になし七頁に雖も他の箇所同一の文字を載せれば、必ずしも第一版執筆の際に説を異にするものに非ず第二版(及び其後の版)に至りてスミスが此數語を挿入せしは彼が自己の眞意を特に明確に言表はさんとの用意に出でたるものなる可し。『労働の全所産は労働者に屬す』を明言するによりて見れば、スミスはアントン・メンガーの所謂『労働全收權』 Das Recht

auf den vollen Arbeitsertrag; right to the whole produce of labour を這箇原始草昧の社會に就ては認めたるものと云ふ可し。然れども右に續く一節は、マルクス（及びリカルド）の流の勞働價值説と全然同一の意を言表はすものと認め難し。スミスの意は費用勞働が交換價值を左右すに在り。即ち主觀的價值の論にあらず、其の『兩者相互の交換に方て』と云ひ、『購ひ支配し交換する』と特に明言するは單に文字の形容に非ず。マルクス及びリカルドの言は之に比すれば遙かに精確にして、スミスの態度の確乎たらざるは『事情』なる文字を屢々用ゆるに徴して見るを得可し。乍併彼が『交換し又は價す』と兩者を重ねて言ひ表はすによりて見れば、此の兩者を同一視したるものと云ひ得可し。畢竟スミスは利用價值に寸毫も想到せざるが故に、交換して得來る價格は即ち其の Worth (價值) なりと考へたるものならずんばならず。而して此原始草昧の社會狀態に就ては、スミスは餘剰のことに言及せず、彼が此に就て論ずるは、此狀態を脱したる進歩せる社會狀態に始めて之を見るなり。然るにマルクスは此原始草昧社會に於ける價值原則に關するスミスの説を解説して次の如く云へり。

Also: unter dieser Voraussetzung ist der Arbeiter blosser Warenverkäufer, und der eine kommandiert die Arbeit des anderen nur, sofern er mit seiner Ware die Ware des anderen kauft. Er kommandiert also mit seiner Ware nur so viel Arbeit des anderen als in seiner eigenen Ware enthalten ist, da beide nur Waren gegeneinander austauschen, und der Tauschwert der Waren bestimmt ist durch die in ihnen enthaltene Arbeitszeit oder Quantität Arbeit. (S. 138.)

即ち此前提の下に於ては、勞働者は單に商品（勞働を滴の賣手たるのみ。故に他人の勞働を支配するものは、自己の商品を與へて他人の商品を購ふものに限れり。現時の資本家を支配するものは全く異なることなり。而して其支配する度合は、彼自らの商品に包含せられある勞働の分量に該當す。何となれば、此場合相對するものは兩個の商品にして、其商品の交換價值は其包含する勞働時間又は勞働分量によりて定めらるゝものなればなり。）を賣手たるのみ。故に他人の勞働を支配するものは、自己の商品を與へて他人の商品を購ふものに限れり。現時の資本家を支配するものは全く異なることなり。而して其支配する度合は、彼自らの商品に包含せられある勞働の分量に該當す。何となれば、此場合相對するものは兩個の商品にして、其商品の交換價值は其包含する勞働時間又は勞働分量によりて定めらるゝものなればなり。

マルクスはスミスの command なる一語を捕へて、之を彼の自説に按排せんと試みたり。スミスが或場合には command (支配する) と云ひ、或場合には necessary (必要なる) と云ひて兩者を同一事視したることは、後年リカルドとマルサスの間に激しき意見の衝突を惹起す所以にして、思ふにスミスは兩者を區別する必要なしと思惟したるものならん。

即ち「支配す」なる語は別段に深き意味を寓するに非ず然るにマルクスは之を以て彼自らの搾り取り説に結び付けんとするものにして右の一句はスミスの眞意を正しく傳へたるものにあらず。換言すれば牽強附會の解説を下すにあらざる限り、スミスは原始草味社會に就ては餘剩價値の事に論及せざるものなり。然るに一度資本の蓄積土地の私有起るを右の状態は變ずりなす。即ち右の一節に直ちに接続して云々

As soon as stock has accumulated in the hands of particular persons, some of them will naturally employ it in setting to work industrious people, whom they will supply with materials and subsistence, in order to make a profit by the sale of their work, or by what their labour adds to the value of the materials. In exchanging the complete manufacture either for money, for labour, or for other goods, over and above what may be sufficient to pay the price of the materials, and the wages of the workmen, something must be given for the profits of the undertaker of the work who hazards his stock in this adventure. The value which the workmen add to the materials, therefore, resolves itself in this case into two parts, of which the one pays their wages, the other the profits of their employer upon the whole stock of materials and wages which he advanced. He could have no

interest to employ them, unless he expected from the sale of their work something more than what was sufficient to replace his stock to him; and he could have no interest to employ a great stock rather than a small one, unless his profits were to bear some proportion to the extent of his stock. (pp. 57—58.)

特殊なる人々の手に資本が蓄積せらるゝに至れば、其中の或者は勤勉なる人民（労働者）を仕事に従はしむるに雇傭す可きや勿論なり。彼等は此等人民に原料と生活資料とを供給し、其生産品の販賣又は此等人民の労働が原料に増し加ふる所のものにより、利潤を得んとするなり。此種精製品を原料の價格と労働者賃銀とを支拂ふに足る以上の貨幣労働又は他品と交換するに際しては、其所有資本を此企業に投じて危険を冒す事業の企業者に利潤として何物か、與へられざる可からず。茲に於てか、労働者が原料に増し加ふる價値は、此場合二の部分に分る。一部は労働者に賃銀として支拂はるゝもの、是にして他の一部は豫め支出したる原料及賃銀の全資本額に對して雇主（企業者）に支拂はるゝ利潤是なり。雇主が労働者を雇傭するは、彼等の生産品を販賣することによりて資本を回收するに足る丈より以上に何物かを取得するの望あればなり。而して又た其利

潤なるものが資本の多少に比例するにあらざれば、少額の資本に安ぜず多額の資本を投下するを敢てするもの無かる可きなり

是れ資本制生産のことを言ふものにして、幾多の私有財産所有者中其有する資本を或事業に投下し、原料及生活資料を豫め支出し、労働者を雇傭して生産に従事せしめ、其生産の結果を賣りて得たる價格の中一部は労働者に勞銀として支拂ふも他の一部は之を利潤として自己に收得する企業者階級の發生することを説くものなり。斯く生産結果の一部を利潤として收得し得るに非ざれば、企業は起ることなかる可く（企業の起るは此利潤收得の事實あるによる）其利潤が又投下資本多ければ多き丈け増加するに非ざれば多額の資本を投下するものにあらざる可きを云ふものなり。マルクスの謂へる如き掠奪云々の事は、スミスは毫も之を云はず。スミスは hazards his stock in the adventure 『企業に自己資本を冒險す』と云ひて、此種資本家の爲す所が危険を冒すことに存し、危険に晒さるゝものは自己資本なることを指摘す。即ち今日の經濟學に於て Kapitalrisiko (資本の冒險) リーフマン曰く Dieses Kapitalrisiko ist das eigentliche Charakteristikum der Unternehmung im wirtschaftlichen Sinne. Unternehmensformen S. 3. 『此資本冒險と云ふんとは經濟的意味に於

ける企業に固有なる特色なり』企業形態論』第三頁と云ふ所のものにして、スミスは夙に之を道破したり。而して利潤存在の理由も、スミスは此資本冒險の事實に存すことなし、此報酬の高は冒險する資本額と比例を保つ可きものなるを明言す。something must be given の『與へられざる可からず』は前後の關係に照して掠奪の意に非ずして、事理の當然の意なることは疑ふ可からず。企業者が企業するは労働者の生産品を賣ることによりて資本回収以外の或物、即ち利潤を收得するの望あるに是れ依る。茲に賣ること云ふは即ち Verwertung なり。『労働者を仕事に従事せしむること』に云はざりしことを能く考へよ。『労働者が原料に増し加ふる所のもの』は『生産品の販賣又は』の次に置かれある所以を考へよ。スミスが主として言はんことを欲する所は、此價值増進行程の意に置ける『販賣』にあること自ら明瞭なる可し。スミスは更に左の如く言へり。

In the price of commodities, therefore, the profits of stock constitute a component part altogether different from the wages of labour, and regulated by quite different principles.

In this state of things, the whole produce of labour does not always belong to the labourer. He

must in most cases share it with the owner of the stock which employs him. (2. H. 59.)

故に商品の價格中には、資本の利潤も亦た其構成部分を成すものなり。其成す所以は、労働の賃銀と全く異り、又た全く異なる原則によりて支配せらる。

此状態の下にありては、労働の全所産は必ずしも皆労働者に属せず。多數の場合、労働者は之を彼を雇備する資本所有者と相分たざる可からざるなり。

茲に altogether different の云ひ regulated by quite different principles の云ふ點細密の注意を要す。即ちスミスは價格の構成部分 第一版にては 價值の一淵源にして見たる賃銀と利潤とは全く異なる性質を有し、之を定むる原則も全く別箇のものたるを特言するものにして、賃銀は費されたる労働に對して支拂はるゝも、利潤は事理然らざる所以、換言すれば利潤は價值増進行程上に於ける餘剰にして、抑も『資本の冒險』を喚起す動機たる次第を明らかにしたるものなり。其『労働の全所産は必ずしも皆労働者に属せず』と云ふは、前に『労働の全所産は労働者に属す』と云へるに對するものにして、労働行程に於ける餘剰價值に論及せざるは其必要なしと認めたるものなる可し。唯此場合には一切の形成せられたる價值は

皆労働の産む所にして、又た労働に歸著す云ひ、而して企業者起るに及べば茲に分解起り、一部は餘剰として企業者に屬する利潤となる所以を示めすなり。其『分たざる可からず』と云ふは事理の自然の意に於て云ふものにして、『分つ可く餘儀なくせらる』の意にあらず。『屬す』『屬せず』とは當然の歸著事實を言表はしたるに過ぎず。『屬す可き』ものが屬せざる可く強らるる』云々の意を寓するものにあらず。然るにマルクスはスミスの前句を解説して謂らく、『スミスの此一節を考究する前先づ一步を停めて反省せよ。先第一に、スミスの所謂勤勉なる人民——生活資料も原料も有せずして空中に飛躍する如き——なるものは何處より來るや。スミスの淺薄なる言表方を言改むれば、畢竟次の意に外ならず。資本的生産は労働條件が或一階級の專有に歸し、労働力の單純なる處分のみが他の一階級に屬するに至る瞬間に始まる。此く兩者が分離するに至れることは、資本的生産の前提たり。第二に、スミスが『資本の所有者は労働所産の販賣又は労働が原料に増し加ふる所のものにより利潤を得ん』の目的を以て、此等勤勉なる人民を仕事に従はしむ』と云ふ真意は如何。彼は此利潤なるものは其販賣より生ずるものこ

爲すや、即ち商品は其價值以上に賣らるゝものにして、スチュフトが『離權より起る利潤』を名けしものに該當し、既存の富の分配を變ずるの謂に外ならざるや。今スミスの次の一節を點檢せよ、彼は『勞働者が原料に増し加ふる價值は二部に分解せらる。一部は勞働に賃銀として支拂はるゝもの、是にして他の一部は豫め支出したる原料及賃銀の全資本額に對して雇主に支拂はるゝ利潤是なり』を説けり。其意を解けば、

Der Profit, der beim Verkauf der vollendeten Ware gemacht wird, rührt nicht aus dem Verkauf selbst her, nicht daher, dass die Ware über ihrem Werte verkauft wird, ist nicht *profit upon alienation*. Der Wert, dass heisst das Quantum Arbeit, das die Arbeiter dem Material zuteilen, zerfällt vielmehr in zwei Teile. Der eine zahlt ihre Arbeitslöhne und ist durch ihre Löhne gezahlt. Sie geben damit nur so viel Quantum Arbeit zurück, als sie in der Form des Arbeitslohns empfangen haben. Der andere Teil bildet den Profit des Kapitalisten, das heisst er ist ein Quantum Arbeit, das er verkauft, ohne es gezahlt zu haben. (S. 140).

精製商品の販賣によりて收得せらるゝ利潤なるものは販賣其ものより生ずるに非ず。即ち商品が其價值以上に賣られたるが爲めにあらす、所謂『離權より起る利潤』にあら

ず。勞働者が原料に増し加ふる價值、即ち勞働量は二部に分割せらる。一部は勞働者の賃銀支拂用のものにして、而して賃銀の形に於て現に支拂はる、即ち元來勞働者に屬するもの、中、賃銀として支拂はるゝ、丈の勞働を勞働者に還付するに止まる。他の一部は資本主の利潤となる、換言すれば、資本主は此の部分の勞働に對しては、勞働者に何物をも支拂はずして他人に之を賣るものなり

と。マルクスが茲に解説を稱するものは、曲解なり、濫用なり、スミスが毫も思ひ及ばざることを彼の眞意なりと誣ふるものなり。かくしてマルクスはスミスを羅織して自家と同様の説を唱ふるものと稱へ、更らにスミスの矛盾を云爲す。マルクスは更らに曲解の筆法を進め終には、スミスは *den Profit auf Aneignung unbezahlter fremder Arbeit reduziert hat*. S. 142. 『利潤を以て支拂はざる他人勞働の占有に歸著せしむ』るものなり、云ふに至れり。スミスの眞意の決して此くの如きものにあらざることは、今改めて辯明するの要なしと雖も、茲に彼が利潤を目して價值の淵源なりとする思想を言表はせる一節あるを示さざる可からず。即ち彼が『故に商品の價格中には資本の利潤も亦た其構成部分を或すも

のなり』云々の一句は第一版に於ては

In the price of commodities, therefore, the profits of stock are a source of value altogether different.....(I. E. pp. 59).

故に商品の價格中に於て資本の利潤は全然異なる價值の一淵源にして云々云ひ居ることは是なり。マルクスは毫も此事に言及せず彼は第一版を見ざりしか否然らざる可し見て而して其言の自己の解説に甚だ不利なるを知りて之を黙殺せしならんことを、a source of value を constitute a component part の改めしは決して意味を改めしにあらず前後の字句を調和せしむる爲め修辭上の改正を加へしに過ぎざることは全章を一讀下すれば直ちに知り得ることなり。更に猶一事あり、ミスは第六章の最終項に左の如く明言し居れり。

As in a civilized country there are but few commodities of which the exchangeable value arises from labour only, rent and profit contributing largely to that of the far greater part of them, so the annual produce of its labour will always be sufficient to purchase or command a much greater quantity of labour than what was employed in raising, preparing, and bringing that produce to market. (I. E. p. 65)

文明國に於ては其交換價值が労働よりのみ起る商品は殆んど皆無にして大多数の商品に就ては、地代と利潤とが其交換價值に大に寄與するものなれば、其國労働の年産額は常に之を生産し加工し、市場に搬出するに用らるゝ労働より遙かに多量の労働を購ひ又は支配するに足る可きなり。

以上順次引用したる所ミス所説の必ずしも遺憾なく透徹したるものに非ざるを示して餘ある可し、雖も而もマルクスの加へたる解説は甚だしく彼の眞意を誤り傳へたるものにして、ミスは餘剩價值の存在を主として販賣即ち價值増進行程に就て考察し、此販賣を掌る人は即ち事業に自己の資本を冒險する人にして販賣市場即ち流通場裡に於て企業者が取得する利潤は畢竟此の冒險によりて産み出さるゝものなるを看破したる第一人と稱す可きものなる所以粗之を證明し得たりと信ず。



## 第五章 補論

本章中引用したるマルクス説は其資本論第一卷に述べたる所に限り。予は労働を以て價値の淵源なりと主張するマルクスの立場の如何に維持し難きものなるかを卒直に明瞭ならしめんを欲するものなればマルクス後年の改説に論及することを凡で避けたり。故に今少しく彼が後年の説を紹介して他人の批評を待つまでもなくマルクス自ら其根本立脚地を破壊するものなる所以を示さんす。

マルクスは其遺稿たる『資本論』第三卷に於て『餘剩價値變じて利潤なる』Verwandlung des Mehrwerths in Profit 及び『利潤變じて平均利潤なる』Verwandlung des Profits in Durchschnittsprofit の二項に就て詳論す。彼先づ論じて曰く

Ini ersten Buch wurden die Erscheinungen untersucht, die der kapitalistische Produktionsprozess, für sich genommen, darbietet, als unmittelbarer Produktionsprozess, bei dem noch von allen sekundären

ren Einwirkungen ihm fremder Umstände abgesehen wurde. Aber dieser unmittelbare Produktionsprozess erschöpft nicht den Lebenslauf des Kapitals. Er wird in der wirklichen Welt ergänzt durch den Cirkulationsprozess, und dieser bildete den Gegenstand der Untersuchungen des zweiten Buchs. Hier zeigte sich, namentlich im dritten Abschnitt, bei Betrachtung des Cirkulationsprocesses als der Vermittlung des gesellschaftlichen Reproduktionsprocesses, dass der kapitalistische Produktionsprozess, im Ganzen betrachtet, Einheit von Produktions- und Cirkulationsprozess ist. Worum es sich in diesem dritten Buch handelt, kann nicht sein, allgemeine Reflexionen über diese Einheit anzustellen. Es gilt vielmehr, die konkreten Formen aufzufinden und darzustellen, welche aus dem Bewegungsprozess des Kapitals, als Ganzes betrachtet, hervorzurufen. In ihrer wirklichen Bewegung treten sich die Kapitale in solchen konkreten Formen gegenüber, für die die Gestalt des Kapitals im unmittelbaren Produktionsprozess, wie seine Gestalt im Cirkulationsprozess, nur als besondere Momente erscheinen. Die Gestaltungen des Kapitals, wie wir sie in diesem Buch entwickeln, nähern sich also schrittweise der Form, worin sie auf der Oberfläche der Gesellschaft, in der Aktion der verschiedenen Kapitale auf einander, der Konkurrenz, und im gewöhnlichen Bewusstsein der Produkt-

tionsagenten selbst aufzuzehren. Das Kapital. III Band I. Theil. Hamburg 1894. SS. 1-2.

第一卷に於ては、資本的生産行程其ものが提出する現象を研究し、此生産行程以外の事情より起る凡ての二次的作用は之を度外に置きたり。然れども此種直接生産行程のみを以て資本の生活行程を盡したりと爲す可からず。即ち現實の世界に於ては之を補ふに流通行程あり。第二卷の研究の題目は之なりき。其第三篇に於て流通行程を社會的再生産行程の仲介として觀察するに方り吾人は資本的生産行程を全體として考ふるべきは、其が生産及流通行程の統一體なることを知り得たり。今此第三卷に於ては、此統一體に就て一般的回想を下さんとするものにあらず全體として考察したる資本の運動行程より起る其の具象的の形態を發見し之を説明するにあり。現實社會の運動に於ては、資本は皆此種の具象的の形態に於て相對立するものにして之に對して、直接生産行程に於ける資本の形態も將た亦た流通行程に於ける其形態も特殊的要因としてのみ現はるゝに過ぎざるなり。従て本卷に於て論ずる資本の各種形態は、漸次社會の表面に於て各種資本相互間の動作及び競争に於て并に生産關與者の普通意識に於て現はるゝ所の其の形態に接近し來るものと知る可し。

其意を平易に言換ゆれば、資本論第一卷は單純に直接生産行程としての資本的生産の理法を説きたるものにして、第二卷は流通生活に於ける方面を考へたれば、以下第三卷に於て始めて一切の方面を綜合して資本移轉運動の全行程の立場よりして、實際生活に於ける其具象的形態を考究す可しとなり。さればマルクスの餘剩價值論は第一卷に於けるものは未だ其全局を言ひ盡したるものにあらず、第三卷に至りて始めて彼が所説の全部を披瀝したる譯なり。然れども其はマルクスが強て爾か云ふに過ぎざるものにして、第三卷の説は如何に強辯を用ゆとも到底第一卷の説と兩立す可きものに非ず、第一卷を取らんか第三卷は全然之を捨てざる可からず、第三卷を取らんか第一卷は全然謬説として取消されざる可からざるなり。即ち本章本文に引用したる彼のアドム・スミス評論は第一卷に述べたる彼の根本見地よりして下せるものにして、第三卷に於ける彼の主張は全く相容れざるのみならず、彼の第三卷の説はアドム・スミスの誤謬なりとして彼が排斥したる所を全く一途に出づるのみならず、更らに論歩一段を進めたるものならずんばあらず。予は第一卷の説よりも第三卷の説を以て遙かに眞理に近きものなりと認むるも

のなり。兎に角予が本書を一貫して主張する所は、『労働は価値の唯一淵源にして又た唯一尺度なり』との説と全く相容れずして、マルクスが其第三卷に述べたる變説したる餘剩價值論と粗ぼ立場を同ふす、マルクスが晩年熟慮の結果到達したる思想は利潤即ち餘剩價值との予が見解に甚だ近きものなることは予に取りて有力なる味方たらずんばあらず。

マルクスは『餘剩價值變じて利潤なる』の條下に説て曰く、價值と餘剩價值とが現實の形態に於ては生産費と利潤とに變ずるは如何なる経過によるやと云ふに、資本の立場より見れば、商品の價は労働にあらざる資本なるによるなり。即ち資本家が一定の商品の生産を營むに方り支出する費用なるものは、畢竟するに資本の支出なり、資本支出を略稱して費用と稱するのみ之を費用價格と名く。而して又他方に於て資本家が生産の結果として收得する餘剩價值は之を利潤とす。此餘剩價值即利潤は投下したる資本のみの生ずる所にあらず。又た可變資本のみの生ずる所にあらずして、獨立なる一所得項目として専ら資本家のみに歸著するものなり。從て此利潤なるものは費用價格と同一物

に非ざるや明らかなり。されば物の價值は不變可變兩資本に餘剩の加はりたるものなりこの第一卷の説明に基きて下したる公式

$$W = c + v + m \quad W \text{ は價值, } c \text{ は不變資本, } v \text{ は可變資本, } m \text{ は餘剩}$$

は、之を實際社會の語を以て言換ゆるときは、價值は費用と餘剩との合計なりと云はざる可からず、依て右の公式は之を左の如く改むるを要するなり。

$$W = k + m \quad k \text{ は費用}$$

之を置換ゆれば

$$k = W - m$$

となる可し。即ち費用は常に價值よりも小なるを知るなりと。マルクスの茲に價值と云ふは今日の學説に於て利用と稱するもの、謂なり。されば

$$\text{餘剩} = \text{利用} - \text{費用}$$

$$\text{利用} = \text{費用} + \text{餘剩}$$

なりと主張する予の説と、マルクスの右の變形とは全然同一趣に歸著するを知る。然る

にマルクスは更らに一歩を進めて

$$W = k + p \quad p \text{ は利潤}$$

なりを主張するものにして

$$W = k + m = k + p$$

なれば之を簡單にするべきは

$$m = p$$

餘剰價值は即ち利潤なりとの結論に到着するなり。本章に於ける予が主張シマルクス晩年の改説は更らに愈々接近するものシ云はざる可からず。否マルクス自ら此結論を認めて説て云ふ。第三卷第一節 第十一頁以下

Der Profit, wie wir ihn hier zunächst vor uns haben, ist also dasselbe was der Mehrwerth ist, nur in einer mystificirten Form, die jedoch mit Nothwendigkeit aus der kapitalistischen Produktionsweise herauswächst. Weil in der scheinbaren Bildung des Kostpreises kein Unterschied zwischen konstantem und variablem Kapital zu erkennen ist, muss der Ursprung der Wertveränderung, die

während des Produktionsprocesses sich ereignet, von dem variablen Kapitaltheil in das Gesamkapital verlegt werden. Weil auf dem einen Pol der Preis der Arbeitskraft in der verwandelten Form von Arbeitslohn, erscheint auf dem Gegenpol der Mehrwerth in der verwandelten Form von Profit. (S. 111).

吾人が茲に見る利潤なるものは餘剰價值と同一物なり。唯其形態の神秘なるが故に之を看取し得易からずと雖も、其は資本的生産方法の本質上已むを得ざる所なり。費用價格の表面的形成に於ては、不變資本と可變資本との間に何等の區別を認むること能はざるが故に、生産行程の間に起る價值變化の淵源は、單に可變資本のみに繋るに非ずして全資本に繋るものなり。又た一方の極端に於て、労働力の價格が勞銀てふ形態に變する如く、他の反對極に於ては、餘剰價值は利潤てふ形態に變じて現はるゝものなり

也。而して謂らるゝ

$$W = k + m$$

$$k = W - m$$

の公式を認むる以上若し

なりとすれば、  
II。

W II K

なる可き筈なれども、其は今日の資本生産の實際に於て決して見るを得ざる所なり。何となれば、餘剰價值なくして生産を営むものあらざればなり。唯其餘剰即ち利潤に多少あるは元より死れざる所なるのみ。即ち

W II 7 600

K II 7 500

なりとせば、其商品の價格は

7 510, 520, 530, 560, 590

等種々なることある可く、從て

7 10, 20, 30, 60, 90

等異なる利潤を收得す可し。故に商品の販賣價格の最低限は其費用價格なりと云ふな

り云々。

マルクスは右の理より説及ぼして、餘剰價值率の利潤に變ずる所以を詳かにして曰く、利潤の形態に於て、現はるゝ餘剰價值は、可變資本即ち労働を支ふる資本のみに繋からず、可變不變兩資本の合計たる資本に繋かるものなれば、

III

なる餘剰價值率一變して

III

Cは全資本

となるは當然なり、是れ即ち利潤率なり。蓋し餘剰價值は資本と労働との關係を示し、利潤は資本と餘剰との關係を示す。故に利潤は又一の資本たり、舊資本に對する新資本是即ち利潤なりと。今少しく其意を詳らかにせんに、マルクスは資本は不變資本 (C) と可變資本 (V) とより成るものとす、不變資本は唯だ價值保存即ち自己回收 Reproduction を爲すに止るものにして、價值の増殖を喚起することなし、可變資本のみ増殖す、即ち餘剰 (III) は凡て可變資本のみの生ずる所なりとす。可變資本は労働者の生計を維持する

の用に供せらるゝ資本を云ふ。畢竟マルクスの宿論「労働のみ價值を生ず」を資本に就いて言ふものなり。さて此の餘剩價值 (m) の之れを生ずる可變資本に對する比例 (m/v) を餘剩價值率と云ふ。之をm'を以て示す。されば

$$m' = \frac{m}{v}$$

又た

$$m = m'v$$

なる公式を作り得可し。次に全資本に對する餘剩の割合  $\frac{m}{c}$  を利潤率と云ふ。之を表はすにp'を以てす。然るときは、

$$p' = \frac{m}{c} = \frac{m}{c+v}$$

なり。今mに換ふるに其價たるm'vを以てするときは、

$$p' = \frac{m'v}{c} = \frac{m'v}{c+v}$$

となる可し。之を比例に作らば、

$$p' : m' = v : c$$

利潤率の餘剩價值に於けるは、可變資本の全資本に於けるに均しきを知る可し。之を數字を以て示せば

全資本 = 1000

内

可變資本 = 800

不變資本 = 200

こして、餘剩 = 100

のや、

餘剩價值率  $\frac{100}{800} = 12.5\%$

利潤率  $\frac{100}{1000} = 10\%$

こして比例

$$\frac{10}{100} : \frac{12.5}{130} = 800 : 1000$$

となるなり。茲に於てか利潤率は常に餘剩價值率よりも小なるを知る可し。何となれば

ば  
 $v/c$   
 $p/v^m$

なればなり。然るにマルクスは此 $p$ には平均率なるものありて、可變不變兩資本の割合如何に異なることも結局生ずる所の利潤は皆平均に歸著す云へり。所謂『平均利潤率の謎』を稱せらるゝものは即ち此謂にして、マルクスの説は更らに一變して、全然第一卷に於ける其主張を根柢より翻したるものなり。茲に於て彼がアダムスミスを難じて、利潤と餘剩價值とを混同したり云ふこと、全然自吾撞著に陥れるを見る可し。猶平均利潤率のことは別に之を批評す可く、本項全體に就ては、拙著『續經濟學研究』中の『マルクス資本論第三卷研究の一節』『不變の資本可變の資本』等を併せ看る可し。

近來企業と餘剩價值とを特に一の題目としたる書顯はれたり。其書名左の如し。

Franz Kellat, *Untersuchung und Mehrwert*. Paderborn 1912.

此書は基督舊教の立場より餘剩價值と企業とを論じ、企業は餘剩價值の收得を目的とす

るものなるを説き、而して基督舊教の倫理の上より其正當なる所以を證明したるものなれば、經濟理論としては、別に見る可きものなれども、其著想の稍々卑説に類するは、偶々以て此種見解の漸く學者間に承認せられんことを一證と見て大過なかる可きか。

本章論ずる所、近來に至り、リーフマンの *Prüfung* 論出でて、大いに之を確めたり。詳しくは同氏著『國民經濟學綱領』『一般國民經濟學』原名共に前に出づを見る可し。

經濟學講義終

國民經濟原論